

人間文化

Vol. 13

2011

人間文化研究機構 第14回公開講演会・シンポジウム

ことばの類型と多様性

問題提起

ことば現象への視座 長野泰彦

講演

アクセントとイントネーション——日本語の多様性 窪園晴夫

「主語」を問い直す 大堀壽夫

言語と認知の類型論

——日本語とマラーティー語の対照研究から見えてくる認知の多様性 プラシャント・バルデシ

言語類型の推移に関わる現象 太田 斎

手話の多様性——手話の類型論に向けて 森 壮也

総合討論 ことばの類型と多様性

コメント 角田太作／菊澤律子

パネリスト 窪園晴夫／大堀壽夫／プラシャント・バルデシ／太田 斎／森 壮也／長野泰彦(司会)

人間文化

Vol. 13

特集

人間文化研究機構 第14回公開講演会・シンポジウム

ことばの類型と多様性

日時：2011年2月19日(土)

会場：有楽町朝日ホール

主催：人間文化研究機構、国立民族学博物館、国立国語研究所

後援：文部科学省、朝日新聞社

協力：国文学研究資料館

目次

あいさつ

金田章裕 1

須藤健一 3

問題提起

ことば現象への視座 長野泰彦 6

講演

アクセントとイントネーション——日本語の多様性 窪菌晴夫 11

「主語」を問い直す 大堀壽夫 17

言語と認知の類型論——日本語とマラーティー語の対照研究から
見えてくる認知の多様性 プラシャント・パルデシ 27

言語類型の推移に関わる現象 太田 斎 32

手話の多様性——手話の類型論に向けて 森 壮也 49

総合討論 ことばの類型と多様性 57

コメント 角田太作／菊澤律子

パネリスト 窪菌晴夫／大堀壽夫／プラシャント・パルデシ／
太田 斎／森 壮也／長野泰彦(司会)

閉会のあいさつ

影山太郎 69

ことばの類型と多様性

あいさつ

金田章裕
(人間文化研究機構長)

人間文化研究機構の金田でございます。人間文化研究機構は国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館の六つの研究機関からなる大学共同利用機関法人です。本機構では所属の六研究機関を中心に、日本各地および世界各地の大学の研究者とともに研究を進めておりますが、その活動をご理解いただき、また広くその成果を共有していただくために、公開講演会・シンポジウムを開催いたしております。

今回は国立民族学博物館と国立国語研究所が中心となって開催するもので、テーマは「ことばの類型と多様性」です。ことばほど日常、多用するものでありながら複雑なものはありません。その複雑さは身近な例を思い浮かべていただければ、すぐ理解できます。例えばこの会場のすぐ隣りに有楽町駅があります。ご承知のように駅というのは鉄道の列車が停車し、人々が乗り降りする施設です。ところが日本の古代では、駅は国家的な道路網に伴って設置された施設でした。鉄道ではなく道路に伴う施設であり、制度でした。明治時代に入ってから鉄道が敷設されるようになって、鉄道の施設を指すようになったのです。その結果、近年、道路沿いに設置されている休憩や商業の施設などで国土交通省に登録されているものは、鉄道の駅と区別するため、わざわざ殊更に「道の駅」と称しているのはご承知のとおりです。つまり、ことばの意味は時代とともに変化してきたこととなります。

英語には、誰でも知っている station という言葉がありまして、日本語と同じような意味で使われています。英語圏の station もかつては道路に伴う施設でした。それが現在では日本語と同じ鉄道の表現に用いられています。異なった国でも同じような対象を表現しているわけです。しかし一方で、station の語は日本語の駅の意味のほかに、施設そのものや部署や場所なども意味します。例えば、オーストラリアの中央部や北

部に行けば広大な牧場があって、sheep station (羊の牧場)、cattle station (牛の牧場) というように表現しています。日本にもこのような表現が入ってきていて、病院のナーステーションはこれと同じような使い方です。

つまり、まったく別の文化圏における異なった言語では、異なった対象をも示していることがあることとなります。対象となる事象の相違もありますが、これが概念にかかわる抽象的なことばの場合、その類似や相違はさらに複雑になります。また、言語そのものの構造の類似や相違といった問題もあります。

本日はことばについて、個々の施設だけでなく、さまざまな要素とその多様性について講演をしていただき、続けて討論を交わしていただきます。ことばの本質に迫る一つの過程をお示しいただけることと思っております。ことばは文化の基本となるものでもあります。グローバリゼーションが進む現代社会において、多様性のある多文化理解の必要性は一層高まっています。そのためにも、共通性あるいは類型の認識は、人類あるいは人間文化の本質にかかわる、極めて重要な事柄であろうと思われれます。本日の講演会・シンポジウムがことばの本質と多様性の理解に迫る機会となることを期待しています。

この機会に皆さまにお知らせするとともに、お願いしたいがございます。今回、本機構が出版社と協力して新しい雑誌『HUMAN』を発刊することとなりました。本機構における研究の成果や研究の過程の情報を広くお知らせいただくための雑誌です。ともに人間文化を考える基礎となればという意図がございます。本日は見本とそのパンフレットを受付に置いてありますが、三月には発売になります。皆さまにぜひご購入いただき、人文系の学問や研究の意義、おもしろさについてご理解をいただきたいと存じます。どうぞよろしく願いたします。

ことばの類型と多様性

あいさつ

須藤健一（国立民族学博物館長）

皆さん、こんにちは。本日は人間文化研究機構主催の「ことばの類型と多様性」の公開講演会にお集まりいただき、誠にありがとうございます。私は国立民族学博物館長の須藤と申します。開会に先立ち、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

国立民族学博物館（民博）は、毎年東京で公開講演会を行っております。今回は人間文化研究機構の公開講演会の一環として、日本語と言語学の国際的な研究拠点である国立国語研究所との共催の形で、国文学研究資料館の協力の下ここに講演会を開催することができました。

さて、世界には現在六〇〇〇もの言語があるとされていますが、そのうち二五〇〇言語が消滅の危機にあります。とりわけ少数民族の固有言語が死語になりつつあります。この五〇年間に二一九語が絶滅しました。昨年、名古屋では一七九の国と国際機関が参加して、生物の多様性を守る条約締約国会議が開かれました。しかし、この民族固有の言語の絶滅という問題に関してはいかがでしょうか。人間集団の生存の基となる文化を生み出した民族と、その貴重な財産の消滅という危機的状况には人類社会は意外と冷淡です。人類学者の中には、植民地主義以前にはこの地球上には数千の文化が存在したけれども、二〇世紀のグローバルゼーションの進展に伴って、世紀末にはその文化が二〇〇になってしまったという警告を鳴らす者もおります。

このような言語環境の下で、本日は世界のことばの多様性と普遍性について国際的に活躍の先生方から研究の一端をお聞かせ願える、またとない機会です。内容は、日本語のなまり、言語における主語の属性、人間の認知と言語表現などの言語現象に見られる多様性のお話と、その対極をなす世界の言語の類型論的ないし地域的特徴や、自然言語としての手話言語の共通性に着目する、類型論的視点からのことばの普遍性に関するお話です。まさにことばについて幅の広い、奥の深い内容です。

ことばの多様性は、人類が生み出してきた豊かな文化と価値観を維持し、未来へと継承する力の源です。本日の講演と討論を通して、皆さまがことばの持つ人間の感情や思考の表現と意思伝達のありよう、あるいはことばの不思議さやおもしろさについて、新しい考え方のヒントが得られることを期待しております。

ここで、民博の宣伝を少しさせていただきます。この東京講演会では民博の研究活動の一端を紹介すると同時に、東京の皆さまに大阪の民博を一層身近に感じていただきたいと思っております。民博は世界のあらゆる地域の文化を展示する博物館を持ち、そして大学院教育も行う世界でもユニークな文化人類学と民族学の研究所です。一九七四年の創設以来、「地の先へ。知の奥へ。」をモットーに人間文化を探求する旅を続けております。

民博の六〇名の教員たちは世界各地で社会と文化についての調査研究に励んできました。また、特定のテーマを課題にする共同研究や国際シンポジウムを組織し、毎年国内外から一〇〇〇名の研究者を招いて研究を進めています。研究だけでなく、異文化に暮らす人々の生活や世界観を深く理解するために民族標本資料、映像音響資料、文献図書資料等、一〇〇万点を超す資料を収集・保存し、民博は「知の情報拠点」としてそれらの情報と資料を広く一般に公開しています。

民博では二〇〇九年から本館展示の新構築を進めてきています。昨年（二〇一〇年）三月に言語展示コーナーを新しくしましたので、その展示の一部を映像で皆さんにご紹介したいと思います。

（ビデオ上映）

言語展示コーナーのイントロ部分には古代のエジプトとギリシャの文字を書いた口ゼッタストーンや夢の石碑を置いています。これがIT機器や多様なメディアを開発、駆使した言語展示場の風景です。

語順のいろいろというコーナーでは、「おばあさんが子どもに昔話を語った」という文章で、世界の一五〇〇の言語の表現パターンを示しております。声で遊ぼうのコーナーにはことばを目で見ても、どのように知ることができるかという非常に面白い装置があ

ことばの類型と多様性

あいさつ

ります。

次が絵本のコーナーです。『星の王子さま』はサン・テグジュペリの作品ですが、現在一八〇以上の言語に翻訳されています。民博ではそれらをそろえて、子どもたちが見られるようにしています。

目のご不自由な方にも点字の絵本に触って、物語を理解していただくという絵本コーナーもあります。『はらぺこあおむし』という絵本は四七か国語に翻訳されていますが、そのうち二五言語に関しては「音の箱」という装置で、自分の読みたい言語で物語を聞くことができます。世界の絵本のことばを、これで理解してもらおうという装置です。

また、「動く地球儀」に自分が知りたい地域の言語をタッチすると、ことばの情報、音声、それから文章が表示されるという装置もあります。そこには約一八〇の言語が入っています。

さらに、「ことばスタンプ」のコーナーには、音と音を組み合わせてことばを作るゲーム感覚の装置もあります。「こ」という音と「わ」という音を合わせて「ごわごわ」という擬態語ができます。このように、音によって言葉がどうできるのかを示しています。

この装置は、作られたことばをアルファベットの表記、英語の説明、あるいは図によって表示してくれます。このように、新しく工夫を凝らしたいろいろな装置をそなえた言語展示場ですので、どうぞ民博へいらしてください。

民博では、昨年七月に亡くなった民博の創設者で初代館長の、梅棹忠夫の人と学問を理解してもらうために三月一〇日から特別展「ウメサオオタオ展」を開催します（六月一四日）。その一週間後には、本館展示のオセアニアとアメリカの展示コーナーを新構築してオープンします。それ以降も四月から研究パフォーマンス、講演会、映画会等、いろいろな催し物を行います。皆さま、関西にいらしたら、緑豊かな万博公園の中にある民博へ足を延ばしてください。そして、「異文化への眼差しと知的発見」の楽しさを味わっていただきたいと思います。

最後に、本講演会の開催にご協力くださいました文部科学省と朝日新聞社に厚くお礼を申し上げます。

ことば現象への視座

長野泰彦

(国立民族学博物館・教授)

はじめに

人文的事象を観察するとき、人は何らかの形で「比較」という作業を頭の中で行っていきます。これは何のためでしょうか？ 観察する「自」と観察される「他」とを相対化するためのこともあるでしょうし、観察対象の幅を広げることによって、その事象の普遍的な面と特殊な面をより明確にするためのこともありましょう。言語学の方法論は、この比較をどのように用いるかを軸に見てゆくとよくわかります。

ことばは文化と歴史の所産であり、いかなる言語もこの桎梏から逃れることはできません。しかし、ことば現象を鳥瞰する立場から眺めてみると、種々のレベルにおける構造上の違いや一致は、多くの言語間で並行的に観察される一般的現象と言えます。系統関係を重視し、当該言語の特殊性を抽出し、同時にその祖型を再構築するこ

とを目的とする歴史言語学（比較言語学）は言語研究の重要な柱のひとつです。他方、系統や地理的分布の違いを超えて比較し、様々の構造上の違いや一致を型として理解し、その特徴によって言葉を分類する論理を見いだすとともに、諸言語に共通する性質を浮かび上がらせることを目的とする言語類型論もまた、言葉を探求する上で等しく重要であります。そこには、比較と分類を通じての特殊性探求と普遍性探求の二面があるのです。本シンポジウムは基本的に言語現象の一般性ないし普遍性を念頭に置いてはいますが、この探究は種々の言語の持つ特殊性と豊かな多様性を大前提としていることを忘れてはなりません。

シンポジウムでの講演内容をもとに発表者が書き下ろした論考を理解する一助として、そこに至るまでの斯学の流れを、類型論を中心に大まかに説明しておきたいと思えます。

1 初期の類型研究

一八世紀後半ジョーンズ (Sir William Jones) はサン・スクリット語がギリシア語やラテン語と親縁関係があるとの指摘を行い、これに触発された印欧語の歴史研究が隆盛に向かいます。この流れの中から、史的变化への関心と同時に分類の必要性が説かれるようになり、シュレーゲル (F. von Schlegel 1808) やフンボルト (W. von Humboldt) は語の形態的組成様式の観点から、印欧語のような屈折を持つ言語を他のグループから差別化することを提案し、孤立語・膠着語・屈折語（多総合語）というタイプを立てることを提唱しました。孤立語 (isolating language) は形態法を持たず、語と形態素が一对一の関係のもの、膠着語 (agglutinative language) は語が二つ以上の形態から成り、かつ、それらの境界が明瞭であるもの、屈折語 (inflectional language) ないし融合語 (fusional language) は語を構成する形態素間に明瞭な境界がなく、種々の範疇がひとつの分割不能な形態に融合しているもの、抱合語 (incorporating language) ないし多総合語 (polysynthetic language) は語彙的、文法的形態素が多く結合して、一語を形成できると、です。

この類型論は、印欧語の比較研究と結びついていて、かつ、孤立語→膠着語→屈折語の順で「進化」するとの素朴な価値観に基づいたものでした。また、形態的基準を絶対視したことから、言語の多様な局面を「一つの簡

単な公式」(E. Sapir 1921) に押し込める結果となってしまいました。

これに対し、より精密な分類基準を提唱したのがサピア (E. Sapir 1921) です。彼は言語によって表現される四つの概念——基本概念、派生概念、具体的関係概念、純粹関係概念——を区別し、これに孤立・膠着・融合の「手法」と「統合の度合い」を組み合わせる分類を提唱しました。特に彼が目していたのは「統合の度合い」です。アメリカ原住民語のような、英語とはまったく異なるタイプの言語を記述することから発想したものと思われ、「これからすわってナイフで黒い雌牛を切り分けようとしている連中」が一語で表現されるパウト語の例を挙げています。サピアの考えは、単純な基準で一般性のある類型化はできないことを立証した点で画期的でしたが、言語を全体的まとまりとして、ある型に当てはめるといふ発想は従前とあまり変わりありません。ただ、特にサピアの場合、言語と思维方法（あるいは認識のパタン）の関係を探究することへの強い関心が見られ、次世代の類型論の発展に示唆を与えただけでなく、ある意味では、今日の認知言語学への先鞭をつけた学者とも言えるでしょう。

2 音韻体系の類型

印欧語研究での青年文法学派の台頭により、音韻対応に基づく系譜的親縁関係の絶対視が有力になると、類型

研究は衰退しますが、二〇世紀に入り、ソシュール (F. de Saussure 1916) 『一般言語学講義』(1916) に触発され、新たな言語研究の態度が生まれてきます。構造主義と言われる流れで、これとともに類型研究が復活します。特に、プラグ学派に見られる機能主義的志向は系譜的近縁関係にのみ適用する比較方法から、親縁関係のない言語間の「共時的比較」(H. Paul 1920) へ、「より普遍的な言語傾向と文法範疇」研究 (B. Trnka 1929) へ道を開きました。

この傾向を代表する類型研究はトゥルベツコイ (N. S. Trubetzkoy) の『音韻論の原理』(1939) で、音韻体系の類型を母音については「聞こえ」と「音色」、子音については「位置」と「克服様式」を基準として示すことにより、より普遍的な音韻の仕組みを明らかにしたのです。

3 統語、含意関係

このような先駆的研究を受け、現代の類型論は①音韻・形態のレベルから、「統語」レベルへ、②含意的普遍法則 (Implicational universals) の導入、によって特徴づけられます。統語レベルへの展開の嚆矢となるのが、テニエール (L. Tesnière 1959) の「文の構造とは、文中の語と語の依存関係の階層である」との考えで、後の語順の類型論に繋がっていきます。また、ヤコブソン (R. Jakobson 1941) は音韻においても含意関係の法則化が、

言語の普遍的特徴を抽出するのに有用であることを実証しました。

ここで含意的普遍法則について触れておきます。これは、XであればY、XであればYでない、XでなければY、XでなければYでない、という四つの論理とその組み合わせによって、事象の生起関係を説明するもので、実例は5節で述べます。

4 語順の類型

上記の流れをさらに加速したのが、グリーンバーグ (J. H. Greenberg 1963) による語順の類型研究でした。彼は「絶対的普遍性」と「普遍的傾向」双方を考慮に入れて、表層の語順を類型化し、それらの類型の間に普遍的な含意関係があることを示そうとしたのです。その基準は①前置詞を取るか後置詞を取るか、②平叙文でのSOVの相対的位置、③修飾される名詞と修飾する形容詞のどちらが前に来るか、④属格名詞と修飾される名詞(句)の位置関係、などで、これを適用して彼は三〇の言語について、四五の普遍法則を抽出することに成功しました。

これに対し、レーマン (W. P. Lehmann 1978) は動詞とその目的語が文の基本的構造と考え、主語の位置とは無関係にVO型とOV型を区別する考えを示し、一方フェネマン (T. Vennemann 1974) は、統語構造はOperandとOperatorの相対関係に依存することを主張しました。

5 統語現象の類型

語順だけでなく、統語現象の類型を様々の角度から研究する傾向も顕著で、例えば、関係節、使役構造、能格現象などが挙げられます。中でも、含意的普遍性をフルに活用して統語現象を説明したものととして、キーナ & コムリー (E. L. Keenan & B. Comrie 1977) の関係節の形成における名詞句の階層に関する研究があります。これは、ある名詞句を関係節化できるか否かは、他の特定の機能を持つ名詞句を関係節化できるか否かによる、という一連の依存関係が見られることを示したもので、「優位性の階層」と呼ばれます。

例えば、英語では名詞 (the boy) にかかる関係節は次の五通りが可能です。

- 直接目的語 the boy who/that Mary loves
- 間接目的語 the boy to whom Mary gave the book
- 斜格目的語 the knife with which Mary cut the meat
- 属格目的語 the boy whose hat Mary took
- 比較名詞句 the boy than whom Mary is shorter

しかし、通言語的に多くの言語におけるこれらの関係を観察すると、言語によっていくつかの制限があることが分かり、かつ、そこにある種の規則性があることが明らかになりました。それは、「比較名詞句が関係節化されれば、属格名詞句も関係化されうる」「属格名詞句が

関係節化されれば、斜格名詞句も関係化されうる」等です。「比較名詞句が関係節化されない」言語はない、ということです。その仕組みをキーナ & コムリーは図①のように描いて見せたのです。

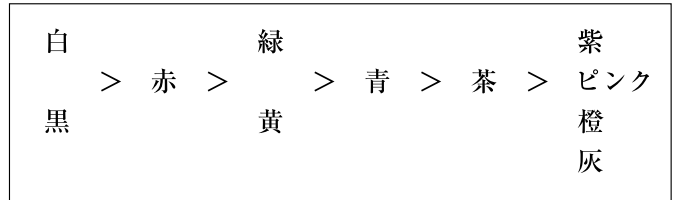
6 優位性の階層

「優位性の階層」という考え方は他の文法範疇についても有効であることが認知されており、隣接する学問、例えば文化人類学研究にも取り入れられています。色彩名称研究がその典型で、バーリン & ケイ (B. Berlin & P. Kay 1969) は一〇〇を超える言語の色彩語彙の焦点を調べ、これが一連の普遍的含意性に基づく、一定の階層性を持つことを発見しました。

図②をご覧ください。これは次のように読みます。(1) すべての言語は白と黒を持つ、(2) 三つ基礎色彩語彙があるとすれば、それは白・黒・赤である(=赤があれば、必ず白も黒もある)、等。多くの言語の発話協力者について色彩の焦点を調べた結果から、このような階層性を見いだしたことで、それが一種の進化を跡づけることになる点を指摘したのは慧眼です。しかし、彼ら自身が規定している

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格目的語 > 属格目的語 > 比較名詞句

図①



図②

基礎色彩語彙基準の適用があまりに甘いこと、当該言語における色彩語彙の構造を無視していることなど、言語学的に見ると、再検討すべきことが山積しています。

7 むすび

言語の類似と差異を類型として把握することにより、何らかの一般原理を発見する糸口となりうることを見てきました。また、系統関係のない言語間の共時的比較から出発したにもかかわらず、史的アプローチにも一定の示唆を与えうることも分かってきました。類型研究はこのように言語現象の一般性を探求するのに魅力ある方法です。ただ、これは多様な言語現象が保持されて初めて可能となる研究であり、ユニークな特徴を持つ少数言語が政治的・経済的に優位な大言語に呑み込まれてゆく現状を食い止め、かつ、改善するため、言語学者は時間との戦いを続けているのです。

【引用した文献】

- Berlin, B. & P. Kay (1969) *Basic Color Terms*.
- Greenberg, J. H. (1963) Some universals of grammar with

particular reference to the order of meaningful elements. *Universals of Language*, pp.73-113

■ Jakobson, R. (1941/1962) *Kindersprache, Aphasie und allgemeine Lautgesetze*. In R. Jakobson, *Selected Writings* 1:328-398.

■ Keenan, E. L. & B. Comrie (1977) Noun phrase accessibility hierarchy. *Linguistic Inquiry* 8:63-99

■ Lehmann, W.P. (1978) *Syntactic Typology*. pp.3-55

■ Paul, H. (1920) *Prinzipien der Sprachgeschichte*. (『言語史原論』講談社)

■ Sapir, E. (1921) *Language*. (『言語』紀伊国屋書店)

■ Sausurre,F.de (1916) *Cours de linguistique générale*. (『一般言語学講義』岩波書店)

■ Schlegel, F. von (1808) *Ueber die Sprache und Weisheit der Indier*.

■ Tesnière, L. (1959) *Éléments de syntaxe structural*.

■ Trnka, B. (1929) *Methode de comparaison analytique et grammairre comparée historique*. *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 1:33-38

■ Trubetzkoy, N. S. (1939) *Grundzüge der Phonologie*. *Travaux du Cercle Linguistique de Prague* 7. (『音韻論の原理』岩波書店)

■ Vennemann, T. 1974) *Topics, subjects and word order*. *Historical Linguistics*. pp.339-376

【言語類型論をもっと知りたい方のために】

■ コムリー B. (一九九二)『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房

■ 佐藤昭裕 (一九八六)『言語の類型』『言語学を学ぶ人のために』一七六〜一九七ページ、世界思想社

アクセントとイントネーション 日本語の多様性

窪園晴夫
(国立国語研究所・教授)

1 言語の多様性

「生物の多様性」ということばをよく耳にするようになりました。昨年名古屋で開かれたCOP10をはじめとして、世界中で生物の多様性を守ろうとする運動が起こっています。実はことばの世界でも、一〇年以上前から「言語の多様性」を守ろうとする運動が世界の言語学界で展開されています。

二〇世紀を振り返ると、言語の世界では少数民族の言語や地方の方言が急速に衰退していった一〇〇年であつたと言えます。この流れは二一世紀になっても収まらず、むしろ加速度化していくと言われています。ある言語学者の予測では、西暦二〇〇〇年の段階で世界中で話されていた約六〇〇〇の言語が、一〇〇年後の二一〇〇年には三〇〇〇〜六〇〇〇言語に減ってしまうそうです (Krauss 1992)。一〇〇年間で実に九〇パーセント

(五四〇〇)の言語が減ってしまうという予測です。この厳しい状況の中、世界の言語学界ではUNESCOや各国政府の援助を受けてさまざまな絶滅危機言語・危機方言 (endangered language/dialect) の調査研究が行われています。

では日本語はどうでしょう。日本語を母語とする人の数は一億人を超えていますので、危機言語と呼ばれることはありません。間違いなく二一世紀まで生き残る三〇〇〇〜六〇〇〇の言語の中に入ると思われます。しかしながら日本語内部の多様性を考えてみると、日本語も例外でないことがわかります。日本語の歴史の中で、二〇世紀はまさに標準語が方言を飲み込んでいった世紀でした。この流れは二一世紀も止められず、逆に標準語化の傾向はさらに加速されることが予想されます。西暦二一〇〇年になると日本列島の北から南まで、標準語かその地方版(地域化した標準語)しか聞かれなくなるか

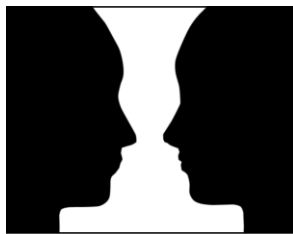
もしもありません。方言が失われることは、言語の多様性が失われることを意味し、多様性が失われることは豊かさが失われることを意味します。これは日本語の活力が失われることにつながります。

方言特徴の中でも語彙(単語)に比べ発音は標準語の影響を受けにくいと考えられています。また発音特徴の中でも、赤ちゃんが早い時期に獲得するアクセント(単語の発音特徴、日本語では単語の中の音の高低)やイントネーション(文における音の高低)は、比較的標準語化しにくいと考えられます。にもかかわらず、若い世代の日本語のアクセントは確実に変化しており、その変化の中に標準語の影響が見られます。たとえば日本語諸方言の中でも保守的——つまり標準語の影響を受けていない——とされる鹿児島方言では、中年層(五〇歳前後)と高年層(七〇歳前後)の間にはアクセントの面で顕著な違いは見られませんが、若年層(二五〜二五歳)のアクセントには質的な変化が見られることが報告されています(窪蘭二〇〇六)。

2 方言と誤解

このように諸方言の特徴が急速に失われつつあると言っても、方言の違いは日常生活のいたるところで見出されます。人の移動、社会の流動性に伴って自分とは異なる方言の話者と日常的に接する機会は昔よりむしろ増えているはずで、方言が異なる者同士の会話は一種の

異文化間コミュニケーションであり、そこに当事者たちが意図しなかった問題——とりわけ無意識(無自覚)の方言差による誤解——が生じます。だまし絵の例としてよく使われるルビンの壺(図①)にたとえるならば、九州の話者が白い壺の絵を描いたつもりでも、それが東京の人には人間の横顔にしか見えなかったり、あるいは、東京の人が人間の横顔を描いたつもりでもそれが東北の人たちには壺の絵にしか見えない、というような状況です。このような誤解はあらゆる種類の方言差(音声、語彙、語義、用法、文法等)によって引き起こされる可能性があります。ありますが、本稿では標準語化の影響を比較的受けにくいアクセントとイントネーションについて、方言差が引き起こす誤解の要因を考察してみたいと思います。



図① ルビンの壺

3 アクセントの多様性

アクセントとは単語のレベルに見られる発音の特徴で、日本語では音の高低がそれに該当します。日本語

の方言はアクセントの宝庫であり、同じ単語でも方言によってさまざまな変容を見せます。たとえば「ありがとう」という日常的な言葉も、あるいは数十年前に日本語に入ったばかりの「マクドナルド」という外来語も、地域が変わるとアクセントが変わります。「雨―飴」などの同音異義語もそうです。ここではいくつかの方言しかあげていませんが、日本語全体ではこれより大きな方言差が観察されます（横棒は高く発音されるところを表わします）（上村一九四一、平山一九六〇、木部二〇〇〇、窪蘭二〇〇六、大津・窪蘭二〇〇八）。

(1)

| | | | | |
|-----|-------|--------|-------|-------|
| 標準語 | ありがとう | マクドナルド | あめ(雨) | あめ(飴) |
| 名古屋 | ありがとう | マクドナルド | あめ | あめ |
| 大阪 | ありがとう | マクドナルド | あめ | あめ |
| 鹿児島 | ありがとう | マクドナルド | あめ | あめ |
| 甌島 | ありがとう | マクドナルド | あめ | あめ |

(鹿児島県)

実際のコミュニケーションの場面では、文脈の助けもあって、方言アクセントがコミュニケーションの大きな障害となることは少ないと思われるがちです。実際、「雨」と「飴」などの同音異義語の多くは使われる文脈(場面)が異なることが多く、アクセントの方言差が誤解の直接的原因となる可能性は比較的低いと考えられます。しかし、複合語が絡んだ同音異義語では、他方言話者の意味を正しく理解することがしばしば困難となります。

(2)

宮城さん―宮城山―宮城産
 汚職事件―お食事券
 孫・悟空(アニメ・ドラゴンボール)―孫悟空(昔話)
 あんな大学―アンナ大学
 早くつまみ、出して。――早くつまみ出して。

「宮城さん―宮城山―宮城産」は標準語でははっきりアクセントで区別されますが、鹿児島弁では区別できません。逆に「汚職事件―お食事券」は標準語では区別がむずかしい一方、鹿児島弁では明確に区別できます。

(3)

| | | | |
|------|-------|-------|-------|
| 標準語 | みやぎさん | みやぎさん | みやぎさん |
| 鹿児島弁 | みやぎさん | みやぎさん | みやぎさん |

| | | |
|------|---------|---------|
| 標準語 | おしよくじけん | おしよくじけん |
| 鹿児島弁 | おしよくじけん | おしよくじけん |

さらに誤解の原因となりやすいのが、アクセントの境界表示機能が関わってくる場合です。たとえば二種類の「孫悟空」(図②)は、単語を一つのアクセント(の山)にまとめるか、それとも複数に分けるかという基準で区

別されます。「つまみ出して」(外へつまみ出す、おつまみを出す)という同音異義文(図③)も同様です。これは(4)のような方言差を示します。母方言が異なる、どちらの意味であるか即座に判断するのはむずかしいのが実状です。



図② 「孫悟空」と「孫・悟空」



図③ 「つまみ出して」と「つまみ、出して」

アクセントよりさらに厄介なのが、イントネーション(文における音の高低)です。たとえば、言語学の教科書には「これ、わかる?」のような疑問文は文末を上昇調で発音し、「これ、わかる。」のような平叙文は文末を上げないと書いてあります。どの教科書にも人間の言語に共通した特徴のように書いてあるようですが、実際にはそうではありません。疑問文の文末を上げない言語は珍しくなく、さらには、文末を積極的に下げることによって平叙文と区別しようとする言語もあります。

日本語の中にも、疑問文を文末上昇で表す方言(東京近畿)とならんで、逆に文末下降で表わす方言(ある南の地域と、青森、秋田、岩手という北東北地方に見られるようです。前者の話者が後者の疑問文を聞くと、それがまるで平叙文のように聞こえます。たとえば鹿児島弁の疑問文が、標準語話者には尋ねているようには聞こえないのです(木部二〇一〇)。

4 イントネーションの多様性

(4)

| | | |
|----------|-------|--------|
| 標準語 | そんごくう | そん・ごくう |
| 鹿児島 | そんごくう | そん・ごくう |
| 甌島(鹿児島県) | そんごくう | そん・ごくう |

| | | |
|----------|--------|---------|
| 標準語 | つまみだして | つまみ、だして |
| 鹿児島 | つまみだして | つまみ、だして |
| 甌島(鹿児島県) | つまみだして | つまみ、だして |

(5)

| | |
|-----|--|
| 標準語 | わかる? / うん、わかる。 |
| 鹿児島 | わか ^ー る? \/ うん、わか ^ー る。 |

「大丈夫」のイントネーションも同様です。鹿児島方言話者が「大丈夫？」と聞いても、文末が積極的に下げて発音されるため東京方言話者にはなかなか疑問文には聞こえません。むしろ「大丈夫。」という平叙文が疑問文のように聞こえてしまいます。尋ねているか（疑問文）、答えているか（平叙文）という基本的な区別について、異方言話者間に誤解が生じる可能性があるのです。

| | | |
|-----|------------------------|--|
| (6) | | |
| 標準語 | だいじょうぶ？↗ うん、だいじょうぶ。 | |
| 鹿児島 | だいじょうぶ？↘ うん、だいじょうぶ。 | |

イントネーションが誤解の原因となることは、同じタipesの方言間でも起こり得ます。たとえば東京と大阪では、疑問文とともに上昇イントネーションで表わしますが、方言間で単語のアクセントが異なるために、話者が受けとるニュアンスも異なってきます。たとえば「わかる？」という文を東京のアクセント・イントネーション（低高低＋文末上昇）で発音されると、関西人の中には子ども扱いされている、あるいは侮蔑されたという印象を持つ人が少なくないようです。イントネーションはしばしば話者の心的態度を示すと言われますが、方言差が

ニュアンスの差となって現われ、日常的なコミュニケーションの障害となることが少なくありません。

| | | |
|-----|-------|--|
| (7) | | |
| 東京 | わかる？↗ | |
| 大阪 | わかる？↘ | |

このような誤解を未然に防ぐためには、日本語と一言でいっても一様ではなく、方言間にイントネーションの違いもあることを認識しておく必要があります。

5 文明と文化

司馬遼太郎は、標準語はその言語の「文明」であり、地域の方言はその地方の「文化」であると言ったそうです。標準語と方言をこのように位置づけると、地方の諸方言が標準語に飲み込まれていくという現在の状況は、日本各地に根付いた文化が日本という国の文明に飲み込まれていく過程と分析できるのかもしれない。

前二節で述べたように、日本語の諸方言はアクセント、イントネーションという点でも豊かな多様性を持っています。方言の多様性が日本語の豊かさを表わしていることを考えると、方言の特徴を守っていくことが重要であることは言うまでもありません。しかし、方言の特徴が

残るといふことは、方言の多様性から生じることばの誤解も残ることを意味します。多様性を守ろうとすればそこから生じる誤解の可能性も残るのです。逆に、誤解の可能性を低くしようとして方言差をなくすと、日本語の多様性・豊かさが失われるという結果になります。どちらをとっても理想的な状態にはなりません。

このジレンマを解決する唯一の方法は、方言の多様性を守りながら、その多様性からコミュニケーション上の誤解が生じないようにすることです。そのためには、皆が方言間の違いを十分かつ正確に理解することが不可欠となります。学校という教育の場では、方言の多様性とそれを守ることの大切さを説くことが必要です。他の方言を受け入れるということは、自分とは異なるものを受け入れるということであり、方言の多様性を大切にしようということは、自分とは異なる価値観を受け入れるということにつながります。方言教育を異文化間コミュニケーションの場と考え、方言を全人教育の教材として積極的に活用していくことが大切だと思われれます。

【参考文献】

- 上村孝二(一九四二)「甌島方言のアクセント」『音声学協会会報』六五―六六号、二二―一五ページ
- 大津由紀雄・窪蘭晴夫(二〇〇八)『ことばの力を育む』慶應義塾大学出版会
- 木部暢子(二〇〇〇)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 木部暢子(二〇一〇)「イントネーションの地域差——疑問文のイントネーション」小林隆・篠崎晃一(編)『方言の発見』一―二〇ページ、ひつじ書房
- 窪蘭晴夫(二〇〇六)『アクセントの法則』岩波書店
- 平山輝男(一九六〇)『全国アクセント辞典』東京堂出版
- Krass, M. (1992) *The world's languages in crisis. Language* 68-1: 4-10.

「主語」を問い直す

大堀壽夫

(東京大学大学院・准教授)

1 はじめに

ご紹介にあずかりました大堀です。本日はこのような場で話す機会を頂き、大変光栄に思います。今日は主語について、機能的類型論という観点から論じたいと思います。主語の問題については多くの方が関心をもたれ、また言語学者の間でも広く議論されてきました。しかし、一般的な理解と専門研究の間に今でもへだたりがあることは事実です。今日のお話も、このへだたりを架橋する試みとしてお聞きいただければ幸いです。

2 ある言語が主語を持つとは どういうことか

「○○語には主語はない」というタイプの議論がしばしばされます。しかしそう言う以前に、ある言語が主語な

どの文法関係をもつとはどういうことか規定する必要がありません。定義なしで主語というとき、英語やその他の比較的良好知られたヨーロッパの言語における主語と同等のものを指す、という暗黙の前提があるように思われます。では英語が主語を持つとはどういうことでしょうか(と言っても、後で見えるように英語は世界の言語の中で標準的とは言えないのですが)。

まず主語というのは文法上の概念です。意味上の概念ではありません。それは言い換えれば、意味だけでは説明できない何かがある、ということなのです。次の例文を見てみましょう。ここではNPで接続した後の節で省略(φで表記)があります。先行する節にあらわれる名詞句(すなわちPatとChris)のうち、後続する節のφが承けているのはどちらでしょうか。答えは、下線で示したとおり、すべての例文でφはNPを承けています。それぞれの文におけるNPの意味上の役割をカッコ内に示しました。

- (1) Pat kissed Chris and ϕ smiled. (動作主)
 (2) Pat met Chris and ϕ smiled. (主題 [= 移動物])
 (3) Pat understood Chris's idea and ϕ smiled. (経験者)
 (4) Pat was kissed by Chris and ϕ smiled (対象)

(1)はPat kissed Chris and smiledとあります。Patがこの場合キスという動作をする人、Chrisがその動作を受ける人です。そして誰がsmileしたかは省略されています。しかし、これがPatであることは英語の話せる人ならわかります。それが英語の規則だからです。では、このような省略要素を解釈するための規則は、動作主という意味上の役割をもった語句にだけあてはまるのか？ そうではありません。(2)～(4)を見るとわかるように、移動して誰かに行くわす人(2)、理解するという心理的な経験をする人(3)、さらにはキスという動作の対象となる人(4)、どれもこの構文においてsmiledの省略された要素としての解釈がされます。等位接続での省略を

- (5) John has been helping his friends. (人称・数の一致)
 (6) John has been helping his friends for himself. (再帰形のコントロール)
 (7) John has been helping his friends, hasn't he? (付加疑問)
 (8) John has been helping his friends but ϕ will go bankrupt soon. (等位接続での同一指示 [既出])

説明しようとすれば、省略要素に先行する節で対応する名詞句は必ず動作主である、というような説明は成り立たないわけです。つまり、それぞれの例で異なった意味をもつPatという語句が、文法的には同じふるまいをする(いわば意味の違いが「中和」される)ということになります。こうして見ると、意味上の役割とは別個の何かを分析上の概念として導入する必要があることになります。この「何か」が主語であるわけです。これが主語を考えるうえで注意すべき第一の点です。
 (8)を見ましょう。次に同じく英語から、それぞれ異なる構文の例(5)～

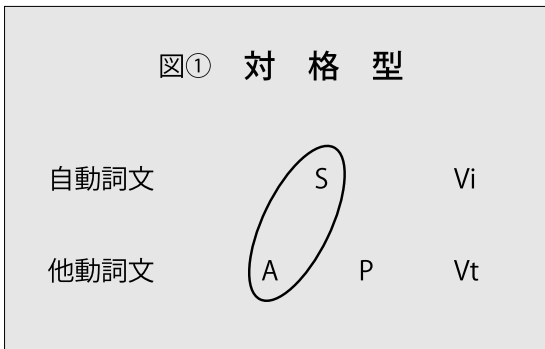
(5)ではJohnに続く助動詞がhasという形をとっています。これは三人称単数です。つまりJohnと人称と数の一致を見せています。仮にhis friendsと助動詞が一致していたらhasではなくhaveになり、John have been helping his friendsという英語としてありえない文になります。(6)では再帰形 himselfはJohnをうけて使われています。もしhis friendsをうけていたら複数の themselves になりますが、これも現実にはありません。(7)は付加疑問で、(7)も his friends をうけることはできないので haven't they? はもちろんおかしいです。(8)はすでに見たのと同じです。ここから何が言えるかというと、英語ではどの構文についても、一貫して優先的な地位をもった語句が認定可能だということです。構文Aにおいて優先的な地位をもった語句が、B、C、D、……のどの構文においても同じ地位をもつとき、それを統一的に扱うために主語と呼ぼうというわけです。これが主語を考える上で注意すべき第二の点です。

ところが世界の言語を見ると、英語のような形では主語が認められない言語が少なからずあることに気がつきます。これは言語類型論の中で過去三〇年以上にわたって積み上げられてきた成果から言えることです。このアプローチでは、多様性があることを前提とし、個々の事実から積み上げることで一般化をはかろうとします (Keenan 1976; Comrie 1989; Whaley 1997)。それから、そうした蓄積の一部を見ていきましょう。

3 対格型・能格型・活格型

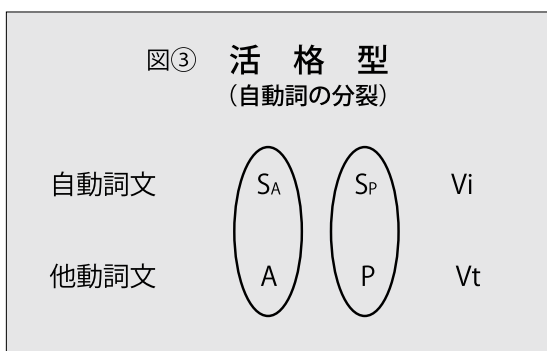
私たちがふれることの多い言語と言えば、日本語、英語それに韓国語、中国語などアジアの言語、それからドイツ語、スペイン語などヨーロッパの言語ですが、これらは主語に関わる性質という点では、一つの重要な共通点があります。それはこれらの言語がみな基本的には「対格型」と呼ばれる特徴をもつということです。それは図①にあるように、自動詞に必ず現われる要素（これをSと呼びます）が、他動詞に現われる要素のうち、能動性をもった要素（これをAと呼びます）と同じふるまいをするタイプの言語です。例えば日本語では「パットが微笑んだ」（自動詞）と「パットがクリスにキスした」（他動詞）の二つの文で、

図① 対格型



(他動詞)の二つの文で、SとAにあたる「パット」がどちらの場合も「が」を伴っています(つまりS || A)。

ところが世界の言語には、これと大きく違った類型の言語があります。その中の一つに「能格型」と呼ばれる言語タイプがあります。これは言語理論の中では一九七〇年代に大きな



研究課題となりました。図②をごらんください。能格型の言語では、他動詞文における動作の受け手（これをPと呼びます）が優先的な地位をもって、自動詞文のSと同じふるまいを示します。例えば(1)にあてはめれば、Pat kissed Chris and φ smiledと言った時に、smileしたのが一つめの節でPであるChrisにあたる語句となる（つまりS=P）ような言語があると言つておきます。

この二つの他に、むしろ「活格型」(active-inactive type)という言語類型も存在します。図③に示したパターンです。次のアチェ語の例をごらんください (Durie 1987)。これはインドネシアの一部の地域で話されている言語です。S_Aは自動詞にあらわれる名詞句の中でも能動的な性格のもの、S_Pは能動性の弱いものです。

例(9)は動詞につく人称の標示についてです。図④に図式化したものをごらんください。動詞は四角で囲んであります。行為者は動詞の先頭に標示されます。他動詞文の(9a)ではgeuがついて「抱く」の行為者である三人称を示しています。(9b)は自動詞文で、同じく「行く」の行為者として三人称が標示されています。ところが、(9c)は同じ自動詞文であるのに、能動性の低い動作であるため、「落ちる」者である一人称の標示が動詞の先頭にありません。つまり、自動詞が能動性の有無によって二つの種類に分かれるということです。

- (9) a. gopnyan geu-mat lôn
 彼(女). 丁寧 3人称. 丁寧 - 抱く 私. 丁寧
 「彼(女)[行為者]が私を[受動者]抱く」
- b. geu-jak gopnyan
 3人称. 丁寧 - 行く 彼(女). 丁寧
 「彼(女)[行為者]が行く」
- c. lôn rhët
 私. 丁寧 落ちる
 「私が[受動者]落ちる」

(10)は不定詞構文です。図⑤に図式化したものをごらんください。角カッコで囲んだ部分です。(10 a)は「料理する」の行為者の人称は不定詞なので標示されませんが、意味的には三人称の「彼女」です。(10 b)は自動詞で、「行く」の行為者はやはり「彼女」です。ところが(10 c)は同じく自動詞でも、「落ちる」のは受動的な動きです。この場合、アチェ語では不定詞構文としては成立しないこととなります。星印*はそのことを示しています。これは日本語とも違う点です。日本語では「行きたがる」

も「落ちたがる」も可能ですが、アチェ語では「落ちたがる」にあたる文は成り立たないということです。こうした事実をまとめると、アチェ語の場合、自動・他動詞とは関係なく、動作の能動性が高い行為者が文法のカギとなります。行為者とは意味的な概念ですから、あえて主語などの文法関係を立てる必要がなく、意味役割だけで文法現象が説明できる種類の言語ということになります。つまり、主語を規定する上での第一の点の不

図④ アチェ語：動詞の人称標示

- | | | | | |
|----|-----------------------------|-----------------------------|--------------------|-------|
| a. | <u>gopnyan</u> 彼(女).丁寧 | <u>geu-mat</u> 3人称.丁寧-抱く | <u>lôn</u> 私.丁寧 | 他動詞 |
| b. | <u>geu-jak</u> 3人称.丁寧-行く | <u>gopnyan</u> 彼(女).丁寧 | | 自動詞 A |
| c. | <u>lôn</u> 私.丁寧 | <u>rhêt</u> 落ちる | | 自動詞 P |

- (10) a. geu-tém [taguen bu]
3人称.丁寧-望む 料理する 米
「彼女のご飯を炊き[行為者]たがっている」
- b. gopnyan geu-tém [jak]
彼(女).丁寧 3人称.丁寧-望む 行く
「彼女が行き[行為者]たがっている」
- c. *gopnyan geu-tém [rhêt]
彼(女).丁寧 3人称.丁寧-望む 落ちる
「彼女が落ち[受動者]たがっている」(非文)

図⑤ 不定詞節内の参与者

- | | | |
|----|--|-------|
| a. | <u>geu-tém</u> [(行為者-) tanguen bu] | 他動詞 |
| | 3人称.丁寧-望む 料理する 米 | |
| b. | <u>gopnyan</u> <u>geu-tém</u> [(行為者-) jak] | 自動詞 A |
| | 彼(女).丁寧 3人称.丁寧-望む 行く | |
| c. | * <u>gopnyan</u> <u>geu-tém</u> [rhêt(-受動者)] | 自動詞 P |
| | 彼(女).丁寧 3人称.丁寧-望む 落ちる | |

成立になるわけです。

ここで見たようなさまざまな言語類型は、研究者の間では一九八〇年代には広く知られるようになりました。他にも、音韻の類型、語順の類型、その他の文法の類型（例えば否定、使役、関係節、など）の研究が行われています。そして世界の言語から見た日本語の特徴について、多くの新しい知識が得られてきました。言語類型論の研究の積み重ねの結果、世界での言語類型の分布をまとめるプロジェクトが発進し、二〇〇五年になって成果が公開されました。これは World Atlas of Language Structures という一種の図鑑兼地図帳で、インターネットで見ることが可能です (<http://wals.info/index>)。

4 同一言語内での「主語」属性の分散

次に、世界のすべての言語に等しくあてはまる主語の概念がないという点を、別の角度から見ていきます。それは主語の属性が分散するという事実です。ある言語に主語があるというなら、それはあらゆる構文について一貫した性質を示す必要があります。ところが、必ずしもそうとは言えないことを示す現象があります。まず日本語の例を見ましょう（より詳しくは柴谷 一九八五、参照）。

- (11) a. 太郎に英語がわかる
 b. 先生に学生（の気持ち）がおわかりになる
 c. *学生に先生（の気持ち）がおわかりになる
 d. 警察に犯人がわかってφ指名手配した
- (12) a. 次郎は息子が新聞に出た
 b. 次郎はお母様が新聞にお出になった
 c. *先生は作品が新聞にお出になった
 d. 次郎は息子が新聞に出てφ心配した

これは日本語研究者の間では昔からよく知られていることですが、日本語でφで標示される語句を単純に主語と呼んでしまうことには問題があります。(11b-c)は「お〜になる」という尊敬構文で、尊敬があてはまるのはガのついた語句ではなく、二のついた語句のほうです。ちなみに(1)〜(4)で見た等位接続での省略についても、(11d)にあるように、二で表される語句が省略された語句に対応します（「警察に犯人がわかってφ国外逃亡した」はかなり不自然に聞こえます）。

例(12)は「〜は〜が〜だ」という、いわゆる二重主語

構文です（実際には主語という言い方は不適切なわけですが）。これを尊敬表現にすると、(12 b・c)からわかるように、ガで表される語句が優先的な地位をもつようです。ところが、等位接続での省略(12 d)を見ると、心配したのはハで標示された語句すなわち次郎であり、ガで標示された語句すなわち息子ではありません。このように、主語を定義すると思われる属性が分散することを見ると、完全に一貫した主語は立てられないということになります。

実は、一貫した主語を立てることに対する問題は、英語においてすら非常に限られた部分ですが見出されません。次の例をごらんください。

- (13) There are spies in this room.
(動詞の一致)
- (14) Are there spies in this room?
(「主語」と助動詞の倒置)
- (15) There seem to be spies in this room.
(「主語」繰り上げ)

これは日本の学習者もつまづく点かもしれません。(13)では文の先頭に *Here* が来ているのに、*be* 動詞はその後にある複数形の *spies* に呼応して *are* になっています。ではこの文では *spies* が主語なのか？ (14)は疑問文ですが、いわゆる主語と助動詞をひっくりかえすという操作は、*Here* に対して行われています。つまり、この点に限っては *Here* があたかも主語のようにふるまっているわけです。(15)はどうでしょう。この文の *seem* は「〜のようだ」という話し手の判断をあらわす語です。いわば、*seem* [*there are spies in this room*] のように *seem* が (13)の文を包み込んでいて、その中からある要素が繰り上げられて文の先頭に現われることになりました。(15)では、繰り上げられるのは *there* です。ではこれは主語と断定できるでしょうか？ しかし、動詞の形を見ると、*seem* は *there* に対して数と人称の一致は起こさず、その後にある複数形の *spies* に対応していることに注意してください。ちなみに (15)を疑問文にするとうるであろうか？ *Do there seem to be spies in this room?* か、*それとも Does there seem to be spies in this room?* か。答えは「両方あり」です。母語話者にきいても判断が分かれることもあるし、データベースで例文の検索をしてみても、両方見つかります。英語のように主語を立てる必然性が十分にある言語でも、観察可能な形を見る限りでは、水漏れがあるわけです。こうなると、喩えるならば「元祖・主語」、「家元・主語」、「本家・主語」というように、いくつもの異なる主語らしき

ものが同時に存在することになります。

以上、この節で見てきた例から、度合いはそれぞれ大きく違いますが、最初に述べた第二の点つまり一貫した主語の存在が成立しない言語がある、ということはおわかりいただけたのではないかと思います。第3節と第4節の分析から明らかになったことは、次のように一言でまとめられるでしょう。

主張 (i) 世界のすべての言語に等しくあてはまる主語の概念はない

5 「新しい見方」 「主語」から「軸項」へ

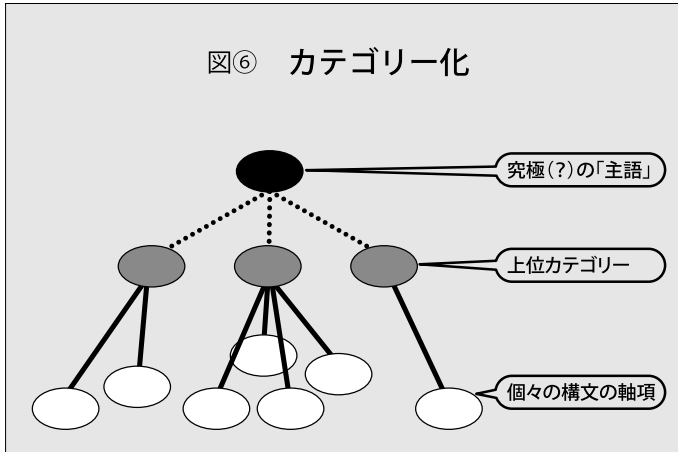
結果として、英語だけでなく、世界の言語（含、日本語）を視野に入れると、ある言語において主語とは構文ごとに別個に規定すべきであり、それらがどこまで一般化できるかは言語によってさまざまである、ということになります。ここで、「軸項」(pivot)という用語を導入します。それは一個の構文について、優先的に取り扱われる参与者と規定します。軸項には意味的基準だけで決まるものと意味的基準だけで決まらないものがあります。注意したいのは、軸項とは構文単位概念なので、「日本語の軸項」は定義上存在しないということです。同様に、「構文Aの主語」も定義上ないこととなります。あるのは「構文Aの軸項」です。

この枠組みによれば、「主語」なるものの性質から見て、

次のような類型が考えられます（より精緻なものはValin 2005 参照）。

- (16) I. 意味的軸項だけの言語
II. 統語的軸項を持つ言語
- a. 多くの構文について非常に一貫した統語的軸項を持つ言語
 - b. 相当数の構文についてある程度一貫した統語的軸項をもつ言語
 - c. 一定の条件のもとに軸項の選択が分岐する言語

まず意味的な軸項だけをもつ言語ⅡタイプⅠがあります。これは少数派かと思いますが、アチェ語はここに含



まれます。次に統語的な軸項を持つ言語ⅡタイプⅡがあります。英語はごらんの通り、多くの(ほとんどすべての)構文について軸項が非常に一貫した言語(Ⅱa)、日本語は比較的多くの構文で軸項が一貫するけれども、統一的とまでは言えない言語(Ⅱb)です。さらに、本日のお話では取り上げる時間がありませんが、軸項の選択が一定の条件のもとにはつきりと分かれる言語(Ⅱc)もあります。

言語全体としてこうした様子を見渡すと、主語とはカテゴリー化の産物であるという結論になります。基本と

なるのは個々の構文です。この点を図⑥に示しました。いくつかの構文について共通の軸項がある場合には、構文のより大きなまとまり、すなわち上位カテゴリーができます。こうしたまとまりがどこまで大きくできるかは言語によって違ってきます。あらゆる構文の軸項から共通点を見出して上位カテゴリーとして認定可能な場合に、その上位カテゴリーを主語と呼びうるわけです。英語のようなタイプの言語では、ほぼすべての構文における軸項が同じであるため、そのような上位カテゴリー化が認められます。日本語の場合、ある程度大きな上位カテゴリーが成立します。そのため限られた範囲で「主語」を認めることは可能ですが、英語と同じ理論化はできません。そして言語によっては上位カテゴリーをもたず、主語の属性が分散するわけです。カテゴリー化とは文法に限らず、人間が誰でも持つ認知能力です。幼児がことばを獲得するときも、生まれたときから脳の中に(あるいは遺伝子に?)「主語」なるものが備わっているわけではなく、発達の過程で接する個々の例、そして具体的な構文から出発して、当該言語でなされるカテゴリー化を身につけていくものだと考えられます。

以上の議論から、主張(ii)に行き着きます。これは言語ごとの変異と共通点をとらえるために不可欠な観点であると思います。

主張(ii)主語にかわり、構文ごとに規定される「軸項」という概念を導入する。

6 むすび

これまでの議論をもとに考えれば、「日本語には主語はない」という表明は、英語のようにほぼあらゆる構文を通じて一貫する軸項をもたないという意味では妥当です。その一方、日本語の文法を論じる上で、意味役割だけでなく、何らかの文法固有のカテゴリーを立てる必要があるのも確かです。英語だけを論じる場合とは違う観点も導入することで、個々の言語のよりよい理解、ひいては人間の言語の総合的な理解がなされることと思います。このような形で、専門的な研究と一般社会との間の橋渡しができれば大きな喜びです。本日はどうもありがとうございました。

【参考文献】

- Comrie, B. (1989, 初版1981) *Language Universals and Linguistic Typology*. Blackwell. (訳『言語普遍性と言語類型論』ひびこ書房)
- Durie, M. (1987) "Grammatical relations in Acehnese". *Studies in Language* 11.
- Keenan, E.L. (1976) "Toward a universal definition of subject". In: Li, C.N. (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press.
- 大堀壽夫 (二〇〇二) 『認知言語学』東京大学出版会
- 柴谷方良 (一九八五) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』一〇月号
- Van Valin, R.D., Jr. (2005) *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge UP.
- Whaley, L.J. (1997) *Introduction to Typology*. Sage. (訳『言語類型論入門』岩波書店)

言語と認知の類型論

日本語とマラーティー語の

対照研究から見える認知の多様性

ブラシャント・パルデシ

(国立国語研究所 准教授)

1 はじめに

私がインドで日本語を外国語として学び、日本に初めて留学したときのことです。テレビの相撲中継でアナウンサーが「横綱が右膝を痛めて休場している」と報告していました。「横綱が膝を痛める」という「XがYをV」型の他動詞表現がマラーティー語（ムンバイを州都とするインド・マハーラーシュトラ州の公用語）を母語とする私に非常に奇妙に聞こえました。なぜなら、この表現がプロトタイプ理論の予想——主語が意図をもって行う意図的事態を「XがYをV」型の他動詞で表現し（例：「太郎が次郎を倒す」）、主語が意図をもって行動を行わない偶発的・非意図的事態を「XがV」型の自動詞で表現（例：

「太郎が倒れる」）する——から逸脱するものだったからです。ちなみに、マラーティー語では上述の事態は「横綱の膝が痛んだため横綱が休場している」のように自動詞で表現されます。

主語には意図がないにも関わらず他動詞で表現される表現が日本語では数多く使われます。「腕を折る」、「指を切る」、「おなかをこわす」、「首を寝違える」、「目を悪くする」などはその例です。これらの事象はマラーティー語ではすべて自動詞で表現されます。外界における同一の出来事を表現する際に日本語とマラーティー語ではズレ・違いが生じます。この表現のズレ・違いはいつたい何に由来するものなのかという問いに光を当てるのが本研究の目標です。

2 意図性の有無による 自動詞・他動詞の使用の検証

言語表現は当該事態の捉え方に動機づけられるとされていきます。事態の捉え方が異なれば、それを反映する言語表現も異なる可能性が高いです。前節で非意図的事態を言語で表現する際に、日本語とマラーティー語でズレ・違いが生じることを述べました。非意図的事態の言語表現化における自動詞・他動詞の選択に見られる言語間の違いはどこからくるのか。日本語とマラーティー語では非意図的事態の捉え方が異なるという可能性が予想されます。はたしてそうだろうか。それを明らかにするために、意図的事態と非意図的事態のビデオクリップを作成し、それを日本語およびマラーティー語の母語話者に見せ、見たものを母語で自由に記述してもらいました。典型的な意図的事態とは人がコップの入っているコップに意図的に手を当てる、コップを倒し、中のコーヒーをこぼすという事態です。

典型的な非意図的事態とは人がコップの向こう側にあるリモコンを取ろうとしたときに思わず手がコップに当たり、コップが倒れ、中のコーヒーがこぼれるという事態です。

この二つの映像刺激を利用し、平成二一年度から二二年度にわたって、日本語母語話者一三名（札幌、岐阜在住の大学生）、マラーティー語母語話者一三四名（プネー市在住の大学生）の被験者の協力を得て、見たこと

を母語で記述してもらいました。被験者にはどちらかの事態のみを見せ、記述してもらっているため、片方の事態はもう一方の事態の記述・説明に影響を及ぼす可能性が排除されています。

人がコーヒーの入っているコップに意図的に手を当てて、コップを倒し、中のコーヒーをこぼすという典型的な意図的事態、および人がコップの向こう側にあるリモコンを取ろうとしたときに思わず手がコップに当たり、コップが倒れ、中のコーヒーがこぼれるという典型的な非意図的事態における一連の出来事はその時空間的な展開順に次の三つの事象から構成されています。

- (1)
 - a 人の手とコップの接触（＝事象1）、
 - b コップの転倒（＝事象2）、
 - c コップの中のコーヒーが流出（＝事象3）

被験者はビデオで見た事態を母語で自由に記述・説明するという手法を用いているため、その記述の中に上記の事象1〜3がどのように表現されているかに注目をしました。つまり、これらの事象がすべて言語化されたかどうか、また言語化された場合、以下の例(2)のようにそれぞれ「当たる」、「倒れる」、「こぼれる」のような自動詞で表現されたか、それとも例(3)のように「当たる」、「倒す」、「こぼす」のような他動詞で表現されたか、またはすべての事象に言及せず、他動詞と自動詞の

(2)

ひじがコップにあたり、 コップが倒れて、 コーヒーがこぼれた。
〈事象1：自動詞〉 〈事象2：自動詞〉 〈事象3：自動詞〉

(3)

女の子がコップにひじをあて、 コップを倒し、 コーヒーをこぼした。
〈事象1：他動詞〉 〈事象2：他動詞〉 〈事象3：他動詞〉

(4)

コップをたたいて、 コーヒーがこぼれた。
〈事象1：他動詞〉 〈事象2：自動詞〉

(5)

コーヒーがこぼれた。
〈事象3：自動詞〉

(6)

リモコンを取ろうとして、コップを倒してしまった。
〈事象2：他動詞〉

(7)

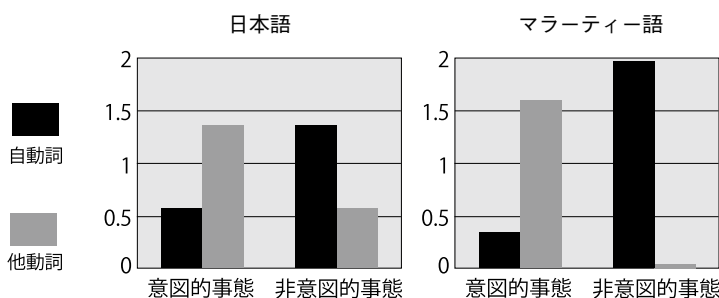
女の子がリモコンを取ろうとして、コップのコーヒーをこぼしてしまった。
〈事象3：他動詞〉

組み合わせ(例(4))、または単独の自動詞(例(5))あるいは他動詞(例(6))、(7)だけを使用して表現されたのかを基準にデータのコーディング(データの分類・分析)を進めました。

各事象の説明で使用された動詞(自動詞または他動詞)をそれぞれ一点として加算し、事象全体の説明で使われた動詞の数が総得点となります。最高点は三点(上記例(2))、(3)で最低点は一点(上記例(5))、(6)、(7)です。言語によって被験者の人数が異なっているため、事象の説明文で使われる動詞の総数を被験者の数で割って平均値を算出しました。まず全体像をつかむために同一事象の説明・言語化における言語ごとの自動詞と他動詞の使用実態を表①とグラフ

| | 意図的な事象 | | 非意図的な事象 | |
|---------|--------|------|---------|------|
| | 自動詞 | 他動詞 | 自動詞 | 他動詞 |
| 日本語 | 0.58 | 1.35 | 1.36 | 0.64 |
| マラーティー語 | 0.37 | 1.59 | 1.98 | 0.03 |

表① 同一事象の説明・言語化における言語ごとの自動詞と他動詞の使用実態



グラフ① 同一事象の説明・言語化における言語ごとの自動詞と他動詞の使用実態

①の形で提示します。
 まず、意図的事態については、言語を問わず、プロトタイプ理論の予想通り、他動詞で表現される傾向が顕著です。また、非意図的事態に関しても、プロトタイプ理論の予想通り、日本語とマラーティー語では他動性の低い自動詞で言語化される傾向が強いです。グラフ①で示したように、意図性の有無によって、自動詞と他動詞の使用の傾向が逆になるというパターンは日本語でもマラーティー語でも同様ですが、特に非意図的事態の言語

化において、日本語とマラーティー語では自動詞と他動詞の使用の差がより極端になっています。マラーティー語では非意図的事態を他動詞で表現する可能性はほぼ皆無に近い状況です。この結果からマラーティー語では意図性の有無が自動詞／他動詞の選択に大きく関わっており、意図性が認められない事態の場合は、他動詞の使用が厳しく制限されることがわかります。この研究によって、外界で展開される同一の非意図的事態を表現する際、日本語とマラーティー語は著しく異なることが浮き彫りになりました。この違いは外界の捉え方（外界の認知の仕方）の違いに由来すると推測されます。

4 まとめ、および今後の課題

この研究の出発点は、日本語とマラーティー語では同一事態（非意図的事態）の表現の仕方に違いが見られるということでした。映像刺激という非言語的な手段を用いて言語表現を引き出すという検証方法を使っても両言語間に違いが見られることが確認できました。この違いは日本語とマラーティー語の外界の捉え方（外界の認知の仕方）の違いに由来すると推測されます。

心理言語学的手法での言語の対照研究によって言語表現の背後に潜んでいる認知の多様性を垣間見ることができ、言語を使用する母語話者の外界の捉え方自体が異なる可能性が浮き彫りになりました。心理学と言語学のコラボレーション（共同研究）をさらに深め、この可能

性を追求する必要があります。この作業は今後の研究に委ねることにします。

謝 辞

言語学と心理学のコラボレーションを模索し、実現に向けて道筋を作ってくださった西光義弘先生（神戸大学名誉教授）、唐沢穰先生（名古屋大学）およびコメントをくださったヤコブセン先生（ハーバード大学）に深く感謝しています。本研究はパルデシ・吉成（二〇一〇）「他動性と意図性の相関関係」（『日本語文法学会第一一回大会発

表予稿集』七五〜八三）の成果の一部を紹介するものです。本研究の準備にあたって吉成祐子氏（岐阜大学）、鄭聖汝氏（大阪大学）、菅さやか氏（東洋大学）、山泉実氏、今村泰也氏（国立国語研究所）にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。本研究に関わる実験調査は、科学研究費補助金、基盤研究（C）「アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究」（課題番号二一五二〇四〇〇、代表：鄭聖汝）および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」の支援を受けて行われています。

言語類型の推移に関わる現象

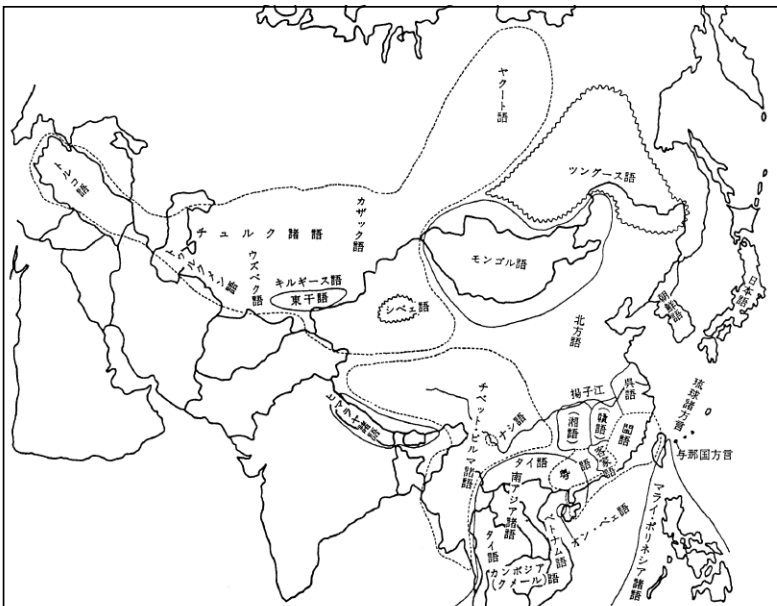
太田 齋
 (神戸市外国語大学・教授)

橋本萬太郎「言語類型地理論」

今回の私に与えられた任務は橋本萬太郎先生の言語類型地理論についてお話しするということです。そのため、他の方々とは異なり、私の今日のお話は学説史的なもので、私自身の研究の紹介ではないということを予めお断りしておきます。なお、今回シンポジウム当日のお話を文字化するに当たり、改めて色々手を入れ、説明に補足を加えた反面、冊子や当日配布の補充資料の中で言及できなかった部分は大幅にカットしてしまいました。このため、シンポジウムで私の話を聞いて下さった方の中にはこの文をお読みになって、異なる印象をお持ちになる方もいらっしゃるかも知れませんが、内容的には変わりありません。

橋本先生は一九八七年、今から二〇年以上も前にお亡くなりになった方です。そんな方の研究を今さら取り上げる意義がどこにあるのかと、疑問に感じる方もいらっしゃるかも知れません。私の知る限り、松本克己先生を

地図① アジアの諸言語



(『言語類型地理論』第4図(『橋本萬太郎著作集』第1巻、内山書店、2000)より)

資料① 「人称代名詞一覧表」——シナ、チベット諸語の人称代名詞(独立代名詞/人称接辞)
(松本克己『世界言語のなかの日本語』三省堂、2007より、p.225)

| | | 1人称単数 | 2人称単数 | 包括人称 | 1人称複数 | 2人称複数 |
|----------------|---------|----------|------------|-------------|------------|------------|
| 漢語 | 古代漢語 | 我/吾 | 汝/爾/乃 | 余/朕 | / | / |
| | 現代北京語 | wo | ni/nin | zan-men | wo-men | ni-men |
| | 現代上海語 | ŋu | ni/non | | ak-la/ | na |
| | 現代広東語 | ŋo | nei | | ŋo-dei | nei-dei |
| 川西 走廊 | ギャロン語* | ŋ/-ŋ | no/-n | yo/i | ŋəñie/-i | ño/-ñ |
| | 羌語* | qa[ŋa] | no | | qathaxua | kuythaxua |
| | | /-Ø | /-nə | | /-əɣ | /-sinə |
| 蔵語 | 古典チベット語 | ŋa | khyod | | ŋa-cag | khyod-cag |
| | アムド語 | ŋa | chyö | (chyö) | ŋazo | khāzo |
| ヒマ ラヤ 西部 | マンチャト語* | gye/-ga | kāʔ/-n | | ŋyere/-ni | kyere/-ši |
| | カナウル語* | ga/-g' | kɑ/-n | kasɑŋa/-ʂe | niŋa/ec | kaniŋa/-fi |
| | ブヌン語* | gyi/-g | han/-na | eraŋ[ʃi]/-g | hiŋ/-g | hanji/-gni |
| ネパ ール | タマン語 | ŋa | ai | yaŋ | in | aini |
| | タカリ語 | ŋo | kyan | ŋyan | ŋi[-ca] | nɔmoɔ-ca |
| ヒマ ラヤ 南部 | バヒン語* | go/-ŋa | ga/-ye | goi/-ya | goku/-ka | gani/-ni |
| | トゥルン語 | go | gana | guy | gucuku | gani |
| | リンブ語* | aŋga/-aŋ | khene'/k'- | ani/ā- | anige/-igē | kheni/-k'ī |
| アッ サム | アボル語 | ŋo | no | | ŋolu | nolu |
| | ボド語 | aŋ | naŋ | | joŋ | naŋ-cur |
| | ノクテ語 | ŋa | naŋ | | ni | ne |
| | メイテイ語 | ai[gi] | naŋ[na] | | aikhoi | naŋkhoi |
| ビル マ | マル語 | ŋo | nɔ | nyɔ-nak | ŋo-nak | nɔ-nak |
| | アチャン語 | ŋa | naŋ | yaŋ-mo | ŋamo | naŋ-mo |
| | ジンポー語 | ŋai | naŋ | yoŋ | anthe | nanthe |
| 雲南 | ラフ語 | ŋa | no | ni-xi | ŋa-xu | no-xu |
| | リス語 | ŋua | nu | zo | ŋuanu | nuwa |
| | ビス語 | ga | na | zaŋ | gu | noŋ |
| | ムヤ語 | ŋə | nə | ya-nə | ŋə-nə | nə-nə |
| シナ・チベット祖語 | | *ŋa/*ŋo | *na/*no | *ya/*yo | | |

除けば、ほとんど継承、発展させる者が後に続かず、現在に至っているという状況ですので、そのような疑問が出て当然ですが、橋本先生の提唱された言語地理類型論は今なお言語の歴史を解明する上で、有効です。特に中国語(漢族の言語のこと。厳密には漢語と呼ぶべきですが、以下、日本における慣例に従って、中国語と呼んでおき

ます)の生成、発展を理解する上では最も可能性のある方法論ではないかと思えます。先生の言語類型地理論の主たる対象が東アジアの言語でしたし、私自身が中国語の研究者ですので、以下は中国語のデータを中心にお話しすることにします。言語グループの名称や分布状況については橋本先生が作成なさった「アジアの諸言語」(地

図①)を適宜ご参照ください。

先ず中国語の抱える問題を指摘することにし、まず中国語の歴史を研究する学問としては比較言語学というものが有ります。これは生物進化の系統樹を思い浮かべて頂ければよいかと思ひます。言語もまた生物同様に、ある祖先から時間の流れの中でさまざまに子孫が生まれ、進化しつつ増えていくといった考え方をします。ここでは、対象となる同系統に属すると思われる言語、方言の同源語彙を比べて、より古い形を推定するということが行われます。同系と考えられる言語同士では使用頻度の高いいわゆる基礎語彙といわれるものを取り上げて、同源と思われる一連の語彙を並べて見ると、どことなく形が似ているものです。そこに現われるバリエーションのすべてを説明できるような形で祖先の言語の形式を推定して行きます。そのようにして古い時代の言語について解明するのです。それでは中国語を他の言語と比べて、どんな言語と親族関係にあるのかというところ、基礎語彙の類似から、チベット語やビルマ語に近いと言えます。それで、シナ・チベット語族という大言語グループの一員というふうにならば考えられています。資料①の松本克己先生の作成された「人称代名詞一覧表」の「シナ・チベット諸語の人称代名詞」という表をご参照下さい(そこでは中国語を漢語としております)。この表の一番下の段に「シナ・チベット祖語」として*のついた形式が挙げられているのにお気づきかと思ひます。シナ・チベット語族というグループに属する諸言語の元々の形

資料①「人称代名詞一覧表」——各言語グループの祖語形式(同、pp.230,231,234,238)

| 言語グループ名 | 1人称単数 | 2人称単数 | 包括人稱 |
|--------------|----------|---------|----------|
| ミャオ・ヤオ祖語 | *ku/*kau | *m[ɔ]i | *bo |
| 北西モン・クメール祖語 | *ku/*kau | *mai | *bo[n] |
| タイ・カダイ祖語 | *ku/kau | *mai | *tau |
| 西部オーストロネシア祖語 | *aku | *[i]kau | *[k]jita |

解して頂きます。ですがこの小文では紙面の都合上、それらの表を全部そのまま挙げる訳には行きません。今は次善の策として、ここに挙げた各言語グループの形式が概略、どのようなものを簡単にご理解頂くために、その祖語の推定形式だけ(一人称単数、二人称単数、包括人稱)、各表からピックアップして挙げておくことにしましょう。続く「各言語グループの祖語形式」という

式は大體、このようなものだったであろうとして推定されたものです。松本先生はこのような諸言語の事例と祖語の推定形式を挙げる一覧表をミャオ・ヤオ諸語(二三〇ページ)、モン・クメール諸語(二二一ページ)、タイ・カダイ諸語(二三四ページ)、西部オーストロネシア・ポリネシア諸語(二三八ページ)など様々な言語グループについても作成していらつしやいます。それらを全部挙げると、一目瞭然、用いられている記号の類似の程度から、中国語の例が、他の言語グループの例とは似ておらず、シナ・チベット語族というグループに属する諸言語の例と似ているというところは直ちにご理

一覧表がそれです。これだけからでも、中国語の例がここに挙げた言語グループの形式とは全然違っていて、シナ・チベット語族というグループに属する諸言語の例と似ているということは実感して頂けるはずです。中国語がシナ・チベット語族というグループに入るという従来の学界の主張に特に違和感をお感じになることはないでしょう。

ところが、言語の種類ということで申しますと、反証とも思えるような特徴が見られます。資料②をご参照下さい。そこにチベット語とギャロン語の例を挙げておきました。チベット語の方はインド系のチベット文字の表記をローマナイズしたもので、信じ難いかも知れませんが、この文字が作られた頃には実際にこのような発音であったと考えられています。ギャロン語の方は、長野泰彦先生のご研究で挙げられている例文をそのまま引用させて頂きました。こちらのローマ字表記も実際の発音を忠実に表わしているものとお考え下さい。これで分かりますように、チベット語の例には屈折語的な特徴が見られますし、その下に挙げた、ギャロン語の例などには著しく膠着語的な性格があるように見えます。さらに付け加えますと、チベット語やこれと同系と考えられるビルマ語では、修飾語が形容詞だと被修飾語の後に置かれますし、「白い馬」なら「白い」+「馬」ではなく、「馬」+「白い」の順)、目的語は動詞の前に置かれます(つまりSOV)。チベット語とビルマ語は基礎語彙の一致のみならず、文法特徴もよく似ていますので、シナ・チベッ

資料② チベット・ビルマ系言語の類型的特徴

| | | | | | | |
|---|-----------|---------------|-------|-------------|--------------|----------|
| 屈折語的特徴 | | | | | | |
| チベット語 (文語) の動詞活用 | | | | | | |
| | | 完了 | 未来 | 命令 | | |
| 学ぶ/教える | slob-pa | bslabs | bslab | slob(s) | | |
| 蔽う | hgebs-pa | bkab | dgab | khob | cf. 隠れる | gab-pa |
| 切る | gcod-pa | bcad | gcad | cod | cf. 切れる、切られる | hchad-pa |
| 西田龍雄「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』Vol.33,pp.21-50 | | | | | | |
| 膠着語的特徴 | | | | | | |
| ギャロン語の動詞接辞 | | | | | | |
| nga | mi-sythis | no-psyng | ko | 私は唾を吐いた。 | | |
| | | {no-psyit-ng} | | | | |
| 私は | 唾を | 下へ | 吐く(私) | た | | |
| nga | mi-sythis | to-psyng | ko | 私は(上に)唾を吐いた | | |
| | | {no-psyit-ng} | | | | |
| 私は | 唾を | 上へ | 吐く(私) | た | | |
| 長野泰彦「ギャロン語の方向接辞」『季刊人類学』15-3,pp.3-70 | | | | | | |

ト語族の中で、チベット・ビルマ語派という下位グループを形成するものと考えられています。なお、ギャロン語もこの中に入られています。中国語はこれらとは別の下位グループになります。どの言語にも、音韻、語彙、文法という階層がありますが、一般にその中では語彙が

最も変わり易く、文法が最も変わり難いという風に考えられております。では安定しているはずの文法特徴の面で大きな違いのある中国語を、変わり易いはずの語彙が似ているという理由で、チベット語やビルマ語と同じ祖先に端を発すると考えることに問題は無いのかという疑問が湧いてきますが、この矛盾については、従来余り問題にされることはありませんでした。恐らく、とにかく先ずは同系と思われる言語同士で同源語彙を比較することから始めるという、比較言語学の研究の作業手順が関係しているのでしょう。

このような問題に真つ向から取り組んで、解決への道を切り開いたのが橋本先生の言語類型地理論です。言語類型地理論は類型の特徴の地理的分布情況から構造変化の歴史的推移を探るといふもので、その基本的考えは資料③をご参照下さい。大きな特徴として、言語の系統関係を越えた類似の形成を説明するのに、それまでの比較言語学ではほとんど考慮されることのなかった言語接触という概念を積極的に導入されています。実際、社会言語学の発展などにより、言語Aと言語Bが接触してA、Bどっちつかずの混交言語が成立するといった事例も色々報告されるようになったということも大きいと思います。比較言語学でそもそも対象とするのは、普通は同系統の言語であって、異系統の言語が接触することのできるこのような混交言語は眼中にありません。仮に元の言語A、Bが同系統であったとしても、これらがすでに失われてしまっている場合、この混交言語からそれらを

資料③ 橋本萬太郎(1932~1987)の「言語類型地理論」

「シナ・チベット諸語の類型上の特色は、…(中略)…これらの言語が、その地理的分布を反映して、ほぼ完全な構造推移の連続体 (continuum) をなしている事実である。たとえば、統辞構造ひとつをとって見ても、カム・タイ諸語群タイプから、ミャオ・ヤオ諸語群、チベット・ビルマ諸語群を介して、中国諸語群タイプへ、または中国諸語群タイプを介して、チベット・ビルマ諸語群タイプへと、連続的な変異をみせ、極端にいうと、そのあいだに、ここという明確な切れ目がない。」 (北村甫編『世界の言語』1981,p.155)

ユーラシア大陸東部の諸言語の類型の特徴は「南」↔「北」で、多少、強弱が漸次推移していくように見える。では漢語の典型的特徴とは何なのか？

北「アルタイ諸語」 ↔ 漢語 ↔ 南「タイ・カダイ諸語」
声調 無 ↔ 少 ↔ 多 ↔ 多

復元することは困難なものです。例えば英語はノルマンコンクエスト(一〇六六)のお蔭で、支配者の話すフランス語の強い影響を受けました。フランス語、英語どちらの言語にも格変化、性などの形態変化があったのに、両者ではその変化のあり方が違っていたので、このときに

資料④ ピジン・イングリッシュ中国語版

中国語の文の単語を訛った英語の単語に置き換えているだけ。語順は基本的に中国語の語順のまま。

One piece takta ship-side talkee my t'at pidgin; my savvy t'at takta-man, he no talkee sah-hwong.
(takta: doctor, talkee: talked, savvy: know, understand <ポルトガル語)

英: On the ship, a doctor asked me that business; I know that doctor, he has never told a lie.

漢: 一個醫生在船上問了我那生意; 我認得那醫生, 他沒說過“撒謊”。

日: 一人の医者 が船上で私にあの商売のことを尋ねた; 私はその医者を知っている。彼は嘘をついたことがない。

PIDGIN-ENGLISH SING-SONG, or Song and Stories in the China-English Dialect with a Vocabulary, Charles G. Leland., 1876, 139p., p.100. 英、漢、日は太田の試訳。

以下は香港のとある理髪店での米国人女性 A と中国人店主 C の会話。逐語訳の中国語及び日本語訳は太田が加えた。前者はそのままでは中国語としておかしいところもある。

A: "Mornin', barber man."

早, 理发(的)人。

日: お早う、散髪屋さん。

note barber man 又 pā-pā-man

C: "Mornin', Missi. Wanchee my cuttee heh?"

早, 女士。愿意 我 剪 发 ?

日: お早うございます。お嬢様。私に髪を刈って欲しい(ということですね)。

note Missi=Missee, miss

wanchee=wantchee, to want

A: "Yes; no wanchee cuttee too muchee. Can cuttee littee."

对, 不 愿意 剪 太 多。可以 剪 少 ?

日: そうよ。刈り過ぎは嫌よ。少なめに刈ってもらえる?

note too, very

too-muchee, very; excessive

littee, little 又 likki

C: "Oll ligh. My savee. My cuttee any man heh. Wanchee shabe? Plentee man cachee

行。我 知道了。我 剪 什么 人 头发。愿意 刮(脸)? (很)多人 要

日: はい。分かりました。私はどんな方の髪も刈ります。顔は剃りたいですか? 皆さん

note savee<ポルトガル語 Savvy, know; understand. 又, sha-pi(sabby)

Plentee, much; very; very much.

my shabe he, ebbily mornin'. Beforetime Hongkong gubbenor ollo time my shabe he.

我 刮 他, 每 朝。以前 香港 总督 古时候 我 刮 他。

日: 私に剃って欲しい(と仰いますよ)、毎朝。以前は香港行政長官も昔は私が剃りました。

被征服者側の英語にそれまでであった複雑な格、性などの変化が失われてしまったというふうに言われています。英語もフランス語も同じインド・ヨーロッパ語族に属し、類型的に見て、同じ屈折語の特徴を持っていますが、このとき英語は少なからぬ屈折語的特徴を失って、一種の

混交言語に変質したのです。このようになってしまった英語から、かつての格、性に関する変化を詳しく復元することはできません。もちろん昔の状態を記録する古代文献から失われた形態変化を知ることは可能です。ですが、もしこのような文献が一切失われてしまったとした

Long time go way now, my no shabe he.”

長時間 過去 現在, 我不刮他。

日: 長い時間が経って、今では剃っていませんが。

from Chapter II. Pidgin-English and Oriental Conversation, pp.7-17,

Chinese Fantastics, by Thomas Steep, The Century Co., New York & London, 1925

注は Pidgin-English Vocabulary, in *PIDGIN-ENGLISH SING-SONG* or Song and Stories in the China-English Dialect with a Vocabulary, Charles G. Leland., 1876, 139p. から

特徴

- ・代名詞は格の如何に拘らず同形。第一人称は *my*、第三人称男性は *he* となっている。
- ・動詞の時制による変化はなく、*-ee* をつけることでアスペクトを示す。日本語の「～た」のようなものだが、「～ている」を意味する場合もあり、機能は多岐に亘る。
- ・発音が中国語風になる。例: *hair>heh, old>ollo, every>ebbily, governor>gubbenor*
- ・ピジン語は当座の意思疎通を目的とした利那的な言語であり、場面（文脈）に依存する度合いが高く、複雑な構文は存在しない。

ら、ノルマンコンクエスタの影響を免れた古めかしい特徴を保持する方言がどこかに現存していない限り、今の英語の方言を比較することだけから昔の英語を復元することは、到底不可能であるということが容易に想像がつくことと思えます。比較言語学では子孫に当たる言語に

は祖先の言語の特徴が概ね反映しているはずだと想定していますが、混交言語は元の言語 A、B がそもそも同系言語とは限らない上に、どちらの特徴も受け継いでいない、どちらにも無い特徴を持つといったことも生じています。つまり、乱暴な言い方をすれば、混交言語は比較言語学にとつて、作業仮説と相容れない言語で、研究対象に馴染まないものなのです。そのため、比較言語学が言語学の主流であった時代には、バルカン半島における言語接触の報告など比較的よく知られていた例があったにも拘らず、混交言語というような概念に対しては懐疑的、否定的な雰囲気が強かったのです。

現在、交易などの目的で、異なる言語を母語とする者同士の間で媒介言語として用いられるようなこのような「チャンポンの言語」のことをピジン *pidgin* 語と総称しています。「ピジン」は「ビジネス *business*」が訛ったものというふうに言われております。ピジン語は利那的な存在で、相互の意思疎通の必要が無くなれば消失してしまうようなものですが、状況によってはそれを母語とする世代が現われ、存続し続けるようになることがあります。このようなピジン語をクレオール語と総称し、両者を区別しますが、言語の類型的特徴という点ではピジン語もクレオール語も同じと考えて構いませんので、以下ではピジン語という言い方でクレオール語も含めることにします。面白いことに、どのような類型の言語が元になったかを問わず、ピジン語ではテンス、性、格といった文法情報を表わす手段が失われ、アスペクトとい

う動作の様態を表わす情報が発達するという共通した類型的特徴を持つと言われております。具体的な例として中国にかつて存在したピジン・イングリッシュ (Pidgin English) の例を資料④として挙げておきました。帝国

生じるといったような状況下においては、基本的な語彙は形が崩れつつも、何とか元の面影を保つのに対し、文法面では大きな変化が現われるという認識です。確かに岡田先生や松本先生のような考え方で、先の疑問

資料⑤ 岡田英弘「ピジン起源説」

ピジン語は「性」、「数」、「時制」、「格」が欠如、アスペクトが発達。これは中国語にも共通する。中国語は北の遊牧民族（狄、戎のアルタイ系、チベット・ビルマ系の言語）と南の農耕民族（夏人の言語。タイ系か？）との間のマーケットランゲージ market language として生まれた。（橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』岡田氏執筆担当第1章「東アジア大陸における民族」の1「中国文明の原型—諸民族の接触と商業都市文明の成立」中国語の起源」pp.76-79の要約）

資料⑥ 松本克己「クレオール説」

「漢語」……は……沿岸系の「東夷」（より具体的には「三苗」つまりミャオ・ヤオ系）の言語とチベット系のいわゆる「西戎」（古文献で「氐」「羌」などと呼ばれた諸族の祖集団）の言語が接触・混合した結果生じた一種の「クレオール」（ないしリングワ・フランカ）として最も適切に性格づけられるだろう。（松本上掲書 2007,p.295）

チベット高原の東部にいた原シナ・チベット語族の一部が東進し、先住民言語と接触することで、中国語の類型が誕生した。

中国語の類型上の問題点：通常、類型特徴は一致するもので、SOV型なら「修飾語＋被修飾語」、SVOなら「被修飾語＋修飾語」であるはずが、中国語はSVOで「修飾語＋被修飾語」で例外的。またチベット語はこれと正反対で、SOV型で「被修飾語＋修飾語」でまた例外的。同系言語でありながら、類型特徴がかくも異なるのは、異系統の言語との混淆の結果。チベット語が本来の特徴を保っているのに対し、中国語は大きく変わった。（松本上掲書 2007,p.124-125 ; 173-174 の要約）

主義列強が中国から撤退した後には消滅してしまつた言語です。まともな考察の対象として取り上げられたことはありませんでしたが、当時中国に滞在した欧米人が面白がつてエッセイや旅行記等に残した記録からその実態を窺い知ることができません。動詞のテンスの変化、名詞の数の変化、代名詞の格変化等が見られないことがお分かりかと思えます。実はわざわざピジン・イングリッシュを持ち出すまでもなく、こういった類型の特徴は正則的中国語そのものにピタリ当てはまります。そこで東洋史学者の岡田英弘先生は、種々の歴史文献の記載に基づき、中国語はピジン語を起源としているというような考え方を提唱されました（資料⑤）。その後、松本克己先生は地球規模の壮大なスケールの言語類型地理論の研究を進められ、そこで魅力的な仮説を提示しておられます（資料⑥）。基本にあるのは、一つの言語が独自の変化を遂げるに当たっては、文法は変化し難いけれども、異なる言語の接触によって混交言語が

をうまく説明できませんが、私にはなお一つの仮説であつて、証明されたとまでは言えないと思っております。もちろん、人文科学においては、数学のような厳密な証明は不可能です。人文科学の中では理屈にうるさく、自然科学に近いなどと言われる言語学もまた例外ではありません。ここでのお話に即して言えば、言語の歴史を人為的に繰り返して検証するというようなことは不可能なのです。そこで、すべての事実がよりシンプルな仮説で破綻無く説明できるということ、そしてその仮説以外の解釈が想定できないこと、つまり説明力の強さを以て証明の代わりとするということになります。松本先生のご研究はそれを目指していらっしゃると思いますが、敢えて偉そうな物言いをさせて頂きますと、私には論拠として示された類型の特徴と「仮説」を結ぶ論理展開には、なお他の解釈の余地もあるように感じられてしまうのです。橋本先生も本音のところではこのお二人の先生と同じようなお考えを持っていらっしゃるかも知れないと思うのですが、先生がこの方面のご論考を発表された頃にはまだ東アジアの諸言語の具体的なデータは極めて貧弱でした。そういった時代的制約があったということも確かに影響しているでしょうが、先生は終始、具体的な言語データを抽象化せず、それに即して分析、考察を進められました。これは恐らくフィールドワーカーでもいらした橋本先生のストイシズムの表われであったのではないかと私は思うのです。時間的、空間的スケールが大きくなければなるほど、言語データの抽象化の度合いを大

きくしなければ、一枚の地図にすべてを収めることはできません。そして抽象化の度合いが大きくなればなるほど、地図から読み取れる解釈はどうしても只一つではなくなってしまうがちです。どのように抽象化するかといった点についても、予断が先に立つ虞、つまり解釈の恣意性が入り込んでしまう虞が無きにしてもあらずです。これは同様に地図を用いて歴史的考察を行う言語地理学にも付き纏う問題です。ご本人に尋ねたことはありませんので、最早確かめようがありませんが、私は、橋本先生はそのような地図の解釈に現われる曖昧性を嫌ったのではないか、そして類型の特徴が何故、そしてどのように「変質」したかということに考察の重点を置いておられたのではないかと推測しています。橋本先生のいわば「ミクロの言語類型地理論」はそのような訳で、具体的な言語特徴を分析する手法として、今なお参考にすべきところが多いと私は考えます。

資料③でお示しした橋本先生のご指摘で、最も分かり易いのはそこに挙げた、南北にかけて見られる声調の総数の推移とそれから音節末子音の総数の推移ではないかと思えます。中国北方には「アルタイ諸語」と呼ばれるチュルク語（トルコ共和国の公用語であるトルコ語及びこれと同系である中央アジアに分布する言語の総称）、モンゴル語、ツングース語（満州語など）を含む言語群が分布しています。これらは声調を持たず、膠着語的特徴を有し、語順はSOV型で、日本語と同じ語順で単語が並びます。ですから日本語、朝鮮語をこのグループ

に含める考えもあります。これらの言語の類型的特徴については日本語を例に類推すれば大体当てはまりますので、イメージは掴み易いかと思います。そして南には声調があつて、孤立語の特徴を有し、SOV型の「タイ・カダイ諸語」が分布します。橋本先生は「南アジア諸語」と呼んでいらつしやるのですが（「アジアの諸言語」へ地図①参照）、実際に想定しておられた言語はいわゆる「オーストロアジア語族」ではなく、タイ国の公用語やラオス人民民主共和国の公用語、そして中国領土内に分布するこれと同系の言語を含むグループと考えられますので、「南アジア諸語」という紛らわしい言い方は止めて、「タイ・カダイ諸語」というふうと呼ぶことにします。

橋本先生によれば、中国語は南の声調言語である「タイ・カダイ諸語」と北の声調を持たない「アルタイ諸語」の間にあつて、「タイ・カダイ諸語」に近い南の方言ほど声調の数が多く、また母音の長短の別といったタイ語と同じ特徴を有しているが、北へ行けば行くほど、つまり「アルタイ諸語」に近づけば近づくほど、声調の数が少なくなると言えます。また資料③の引用には言及がありませんが、音節末の子音の数といった点でも、南の方言では $m, n, ŋ : p, t, k$ の六種あるのに、長江辺りの方言だと、 $m, n : ʔ$ の三種、更に北に行くと、 $m, ŋ$ の二種といったように漸減するように見えるというようなことも、他で指摘しておられます。

それでは、以下に橋本先生の言語類型地理論の分析例をいくつかご紹介することにしましょう。

橋本先生の分析例

1. 沖縄方言の三項対立（資料⑦）

音声学では音を上顎と下顎のどの部分を狭めたり、くつつけたりして発音するかで規定します。これを調音点と言います。今度は、同じところを使って発音する音声は何種類あるかと考えますと、日本語では例えば上顎の歯茎の裏側あたりと舌尖とをくつつけて発音する音には $1. ɸ$ 、 $2. ɸ$ 、 $3. ɸ$ の三種類があります。順に $1.$ 無声音（国語学でいう「清音」）、 $2.$ 有声音（国語学でいう「濁音」）、 $3.$ 鼻音です。 $1.$ 声帯が振動しない、 $2.$ 声帯が振動する、 $3.$ 声帯が振動し、かつ肺からの呼気が鼻腔に抜ける、といった違いがあります。このような発音の仕方の違いを調音方法と言います。つまり同じ調音点の子音を調音方法で分類すれば三種類あるということになります。このうち鼻音は普通、除外して考えるので、そうすると残りは二種類ということになります。これを「二項対立」と言います。唇を使った発音でも p, b の二種類、奥の方をくつつける発音でも $m, ŋ$ の二種類で、調音点が違つても、二項対立という点では共通しています。一方、中国語はというと、普通話と呼ばれる公用語であれば、 $p, pʰ : t, tʰ : k, kʰ : …$ のように前者が無声無気音（息漏れを伴わないタイプの子音）、後者が無声有気音（息漏れを伴うタイプの子音）と拵がついている要素は違いますが、やはり二項対立ということが言えます。このような状況下で、日本語の中では沖縄、それも最西南端の方言だ

資料⑦ 沖縄方言の3項対立

…同じ日本語の方言でも琉球方言（沖縄方言）の、その最西南端の方言だけには、たとえば与那国方言の：

[ta] (月) : [tʰa] (手) : [da] (字)

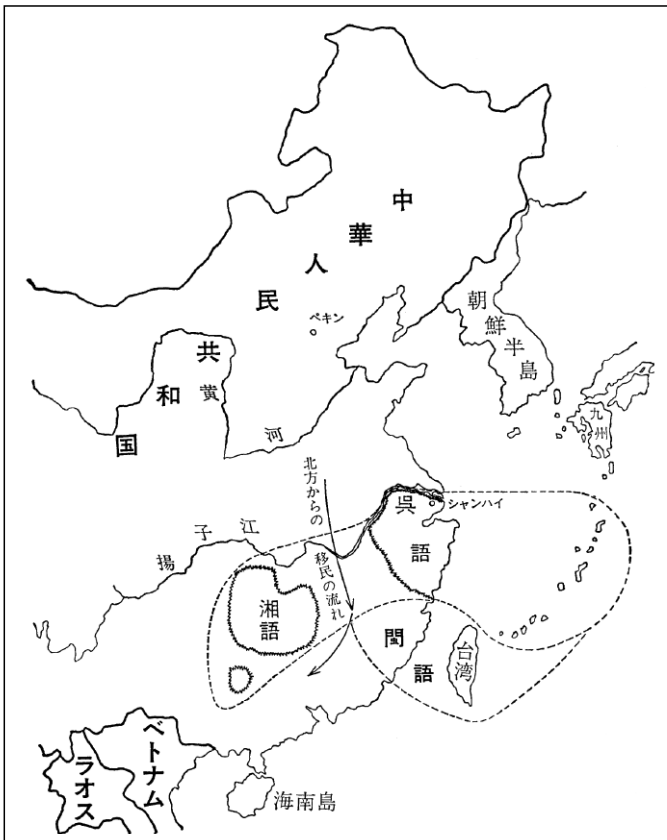
[ti] (舌) : [tʰi] (田) : [di] (家)

のように、無声無気音：無声有気音：有声音という、三項対立がある。これはまさしく大陸の中国語の、それも沖縄に近い部分にはなされている方言（げんみつには揚子江下流の呉語と、それよりかみの中流地域に話されている湘語——ただし呉語と湘語は、かつては明らかに地域的にもひとかたまりをなしていたが、そのまんなかを客家の南下で分断されたものである可能性が大きい；音声学的には、閩語——与那国のすぐ隣りの台湾に話されている中国語をもふくむ——もこれにふくまれる）にしかみられない現象である。

『言語類型地理論』 pp.28-29

地図② 3項対立の地理的ひろがり

(橋本萬太郎『現代博言学』第55図〈大修館書店、1981〉p.350より)



けには p.p.h.b : t.t.h.d : k.k.h.g : ……のような三項対立が見られるというのです（柴田武先生の研究に基づく）。これは何故なのか。中国語の方言を見ますと、実は沖縄に近い長江下流地域の方言でも、 p.p.h.b : t.t.h.d : k.k.h.g :

……のように三項対立になっているのです。地図②の「三項対立の地理的ひろがり」をご覧ください。長江下流の呉語とやや離れて西に分布する湘語は元々連続して分布する一つの方言域であったが、客家の南下で分断されたというようなことも仰っています。中国と沖縄の交渉の歴史も踏まえた上で、沖縄方言の三項対立は、中国の長江下流地域の三項対立を持つ方言の話者が沖縄に移住し、日本語を習得するといったようなプロセスを経て、成立したのではないかと結論づけておられます。

資料⑧ 中国語方言のテンス／アスペクト

1. 北方中国語 (区別無し)

過去/完了 他 + 去 + 了 + 学校 + 嗎? “Did he go to school? / Has he gone to school?”
かれは 行っ た 学校へ か

2. 客家語 (梅県方言)

過去 佢 + iu + 去 + 学堂 + 嗎? “Did he go to school?”
彼は た 行っ 学校へ なかった

完了 佢 + 去 + (l)e + 学堂 + 未? “Has he gone to school?”
彼は 行っ た 学校へ か

3. 閩語 (スワトウ方言)

過去 伊 + u + 去 + 学堂 + 無? “Did he go to school?”
彼は た 行っ 学校へ か

完了 伊 + 去 + lau + 学堂 + 未? “Has he gone to school?”
彼は 行っ た 学校へ か

4. 粵語 (カントン方言)

過去 佢 + iau + 去 + 学校 + 有?
彼は た 行っ 学校へ か

完了 佢 + 去 + tso + 学校 + 未?
彼は 行っ た 学校へ なかった か

『現代博言学』第2章 pp.93-94

資料⑨ 北方語(ペキン語)のテンス表現の痕跡

1) 他 + 去 + 学校 cf. 他 + 上 + 学校 + 去
かれは 行く 学校へ かれは へ 学校 行く

2) 他 + 不 + 去 + 学校
かれは ない 行く 学校へ

3) 他 + 去 + 了 + 学校 ← 3) [他有去学校?]
かれは 行っ た 学校へ

4) *他 + 不 + 去 + 了 + 学校
かれは なかつ 行か た 学校へ

5) 他 + 没 + 有 + 去 + 学校
かれは なかつ た 行か 学校へ

6) 他 + 去 + 了 + 学校 + 没有?
かれは 行っ た 学校へ なかった

7) 他 + 有 + 没有 + 去 + 学校? (南方式) ← 7) [他有去学校、不有去学校?]
かれは た なかった 行っ 学校へ

『現代博言学』第2章 pp.96-100

「有」現代北京語 /yōu/ [iəu] (// はピンイン表記);

6,7世紀頃の中国語 fiəu (fi は h の有声音)

2. 中国語のテンスとアスペクト

英語を習ったときに、テンス(時制)ということばを耳にしたことがおありかと思えます。発話の時点を現在として、過去、未来のことを述べるときに動詞の形が変わるような現象です。これに対し、現在完了とか未来完了、過去完了というようなことばもお聞きになったこと

があるでしょう。ここで言う「完了」は動詞が表わす動作が終わってしまったという情報を表わすもので、動作の様態についての情報の一種で、これをアスペクトと総称しています。アスペクトにはこの他、持続、経験といったようなものがあり、中国語ですと、例えば、動詞に接続する「了」(完了)、「着 zhe」(持続)、「過 guo」(経

験)などがそれに当たります(ローマ字はピンインと呼ばれる表記法)。今、テンスとアスペクトの違いを英語で表現すれば、

● 過去 Did he go to school ?

● 完了 Has he gone to school ?

というふうに分けられることができます。北方中国語ではこの違いを表わすことができません。ところが、客家語(例は梅県方言)、閩語(例はスワトウ方言)、粵語(例はカントン方言)といった南方方言ですと、ちゃんと区別できるので(資料⑧参照)。ここで、区別のある方言においては、

● 過去…動詞にたいする前置成分。

喉音系の頭子音を持つ。

● 完了…動詞にたいする後置成分。

齒音系の頭子音を持つ。

という共通点を指摘しておられます。これを踏まえた上で、今、北方語の例として資料⑨の北京語(北京語)を見て頂くと、興味深いことが分かります。すでに指摘したように、北方中国語では過去(テンス)と完了(アスペクト)の区別ができません。「去了」としか言えないのですが、否定文では「没去了」ではなく、「没有去」、反復疑問文では「去不去」/「去没去」(「去(了) 没去了」) / 「去(了) 没去了」ではなく、「去了没有」(「去(了) 没去了」)ではなく、「有没有去」(「有(去) 没有去」)となり、「去了」が「有去」に取り換えられているように見えます。このことは中国語を習ったこと

資料⑩ タイ・カダイ諸語のテンス/アスペクト (『現代博言学』第2章より、pp.115-116)

1. チョワン語

完了 tōu¹ + dai¹ + na² + liu⁴ ‘わたくしたちは、はたけをたがやした’

私達は 耕し 畑を た

過去 soi⁶ + dei¹ + son¹-tiu² + fai¹ ‘2本の堤防を修理した’

修理した 2本の 土手を

2. ペエ語

完了 mǎ² + kon¹ + p^hia⁴ + ʒau³ + mǎn² ? ‘あなたは食事をしましたか?’

あなたは 食べ メシを た か

過去 mǎ² + lai³ + mǎn² + lai³ + ʒam³ + kǎ² ? ‘あなたは、彼をよびましたか?’

あなたは た なかつ た 呼ん かれを

(直訳: よびましたか、よびませんでしたか)

3. ラオス語(ラオ・ルム方言)

完了 khooy + hetkaan + leeu ‘わたくしは、はたらき(おわり)ました’

わたくしは はたらい た

過去 laau + day + pay + naa ‘かれは、畑へ行つた’

かれは た 行つ 野へ

4. タイ語(バーンコーク方言)

完了 khǎw + kin + kǎaw + lææw ‘かれは、もう食事をしました’

かれは 食べ メシを た

過去 khǎw + dǎay + kin + kǎaw ‘かれは、食事をしました’

かれは た 食べ メシを

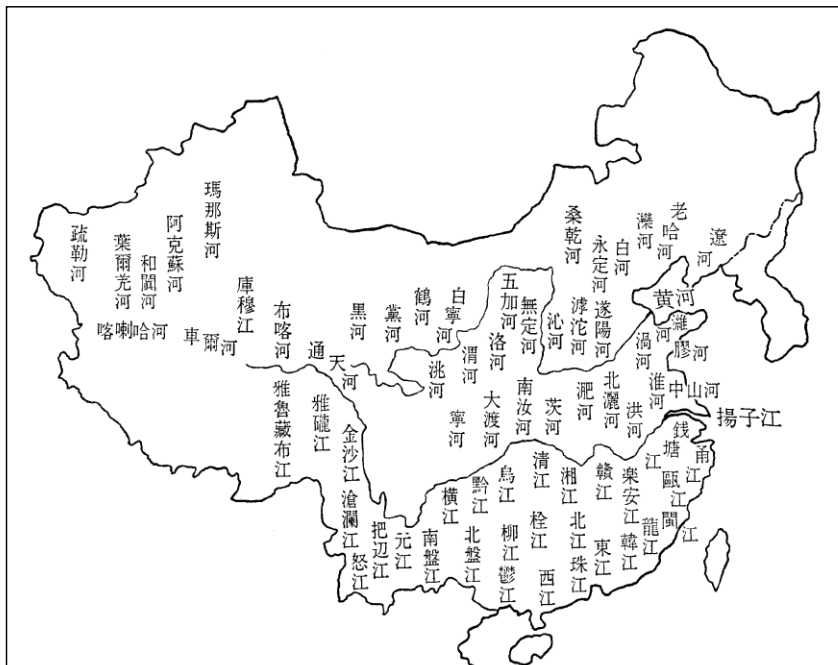
のある方ならよくご存じのはずです。そこで、かつては北方中国語も現在の南方方言同様に、過去「有去」…完了「去了」といった違いがあったが、両者を区別しないアルタイ諸語の影響を受けた結果、両者の違いを失って「去了」としか言えなくなりました。しかし否定形や反復疑問形においてはそれが痕跡的に残っているのだということです。そして「去了」としか言えなくなりましたこと、アルタイ諸語の動詞接辞が後置されるものであることと無縁ではないとお考えです。「有」は

今の北京語ではイオウまたはヨウのような発音ですが、かつて喉音の頭子音を持っていましたから、この点でも南方方言の特徴と一致しています。付け加えるなら、資料⑧で挙げた南方方言の特徴は資料⑩のタイ・カダイ諸語に属する言語と一致しているのです（但し過去のマーカーの音声形式は一致せず）。要するに、南方ではアスペクトとテンスが区別されているのに、北方ではそれが合一しているのは、北方の「中国語」がアルタイ諸族の、黄河下流域を中心としたいわゆる中原地方への侵入の結果できあがったものであることと関係するということなのです。

3、川の名の南北対立

これは橋本先生お一人の研究ではなく、J・ノーマン(Norman)、梅祖麟という二人の研究者との共同研究で分かったことです。日本語だと川の名前は「信濃川」とか「石狩川」とか、「〜川」という形でしか出てきません。中国の河川名はこれに比べると、少しは多様性があり、「〜水」とか「〜溪」とかいうようなものもありますが、全国的に見て、圧倒的多数は「〜河」か「〜江」でしょう。代表的なものとして、北の黄河と南の長江(揚子江)が真っ先に挙がります。それでは、「河」と「江」は意味的にどう違うのかというと、実は辞書を引いてみても良く分かりません。ところが全国の河川名を地図で確認してみると、面白いことが分かります。おおむね長江を中心にして、北ではほとんど全部「〜河」であるの

地図③ 中国大陸の「かわ」(『現代博言学』第57図、p.371より)



に對し、南ではほとんどが「〜江」で現われるのです。「中国大陸の「かわ」(地図③)を参照。

そこで、「江」は中国大陸の南半分にいた民族が話していた言葉、「河」の方は北半分にいた民族が話していた言葉に由来するのではないか、もつと具体的に言えば、「江」は、現在の雲南やインドシナ半島で話されて

資料① アルタイ諸語、タイ・カダイ諸語の川を表わす語

「江」モン・クメール諸語 バナール語、セダン語[kron]、カトウ語[karuŋ]、ブルウ語[klon]、
フレエ語[khroaŋ]、古代モン語[kruŋ]

「河」モンゴル語[yool]

現代北京語の発音 「河/hé/」 [xv] ; 「江/jiāng/」 [tɕiaŋ] (/ / はピンイン表記)

古代中国語の推定音価 「河」 *yul ; 「江」 *kron

『言語類型地理論』 pp.78-82

「フー」とも「ヘー」ともつかないような音で、カタカナではうまく表記できません。以上に、この現代モンゴル語の発音に近いのです。そして南の「江」にしても、

いる言語からきた言葉、「河」は北のモンゴル語のような言語に由来する言葉なのではないかというのです。ここで挙げられた言語で、「川（かわ）」を実際にどう呼んでいるか、資料①をご参照ください。北の方はモンゴル語の例しか挙げておりません。「黄河」が「黄河」と名づけられた頃のその元となった言語の「川（かわ）」を表わす語がこの現代モンゴル語の発音と同じであったとは限りません。しかし興味深いことに、古代中国語の「河」という字の推定音価は現在の北京語の発音（「ホー」とも

今ではカタカナ表記すれば「チアン」というような発音ですが、これも近年の研究では、古代中国語では「クロン」のような発音であったと考えられるようになっており、やはり南の諸言語に見られる「川（かわ）」を意味する語の発音ととてもよく似ているのです。

橋本先生のご指摘が単なる偶然の一致というのではなく、中国語音韻史の研究成果を踏まえ、周到に理論武装した上で、そこには必然があるのだと主張していらっしやることを理解して頂けましたでしょうか。

可能性に満ちた学問

実は冒頭で、橋本先生の研究には後継者がほとんどいないというようなことを申しましたが、それは決して橋本先生の研究に価値がないということを意味するのではなく、一人の人間が同時に、一般言語学の広い知識と多くの言語の歴史に関する深い知識を持ち、様々な具体的言語データを精確に分析できるということが希有なことだからです。例えば中国語研究者は世界にたくさんいますが、その中で中国語史を深く理解している人間はどれだけのいるか、一般言語学をちゃんとマスターしている人間はどれだけのいるか、フィールドワークをやったことのある人間はどれだけのいるか、さらにはチベット語やタイ語、朝鮮語も知っている人間は、と問うて行くと、すべてを兼ね備えた人はごく僅かということになるでしょう。これは言語学者でフィールドワークの経験があつて、

中国語を理解していて、……というふうに順番を変えて問うても同じことです。

また何とも非科学的な物言いでも恐縮ですが、言語データは文献からも知ることはできませんが、その言語についてフィールドワークを行ったことがあるかどうかで、見る目が違ってくる場合があります。フィールドワークの経験の無い人間には生の言語データの精確な分析はできないなどと言うつもりは毛頭ありませんが、自分で生の言語、方言を調査して、そこで得られたデータについて自分なりに纏めて行くなかで、その言語、方言に対する精確な認識が培われ、フィールドワーカーは鍛えられて行くものです。橋本先生の言語類型地理論に見られる確かな分析を支えていたのは、正にこの方面の豊富な経験であったと思います。学問は成熟に向かうと細分化する傾向があります。そして細分化した分野ではより精緻な分析が行われるようになります。ですが、その行き着く先が素晴らしいものかどうかは疑問です。方法論の完成とは、同じデータを扱えば誰もが同じ結論に辿り着くことを意味するものと思いますが、それは同時に研究者の没個性化の完成をも意味することになるからです。そのような完成された学問には最早いかなるデータを扱うかという着眼点のユニークさしか研究者の個性を発揮する余地は無く、方法論を自ら構築するというような知的

醍醐味は残されていないのではないのでしょうか。プリミティヴな何でもござれの研究は知の巨人と言われるような人にしか出来ないものだと思いますが、怯まずにそれを追求することが真の研究者としての存在証明に繋がるのではないかと思います。橋本先生の言語類型地理論はそのような意味で、正に可能性に満ちた学問です。橋本先生は常々、言語の研究において、「何故」という問いかけが大事であると、言っておられました。このことは比較言語学では「どのように」変化したかを説明するのが大事で、「何故」そのように変化したのかという問いかけは無意味であると言われてきたことを考えると、意味深長です。知的営為においては「何故」という問いかけこそが最も大きな「個」の思索の推進力になるのではないのでしょうか？ 言語地理学や言語類型地理論はその「何故」という問いかけが大いに意味を持つ学問分野です。そういった点からも、今回ご紹介した言語類型地理論は魅力的な学問であると言えましょう。確かに誰もが橋本先生のような資質を持ち合わせている訳ではありません。そこが大変問題なのですが、自分自身にこの学問に従事する能力があるかどうかということを取り敢えず不問にして、このように申し上げて、私のお話を終わりにしたいと思います。

【参考文献】（一部、本文で言及していないものを含む）

- 岡田英弘『中国文明の歴史』講談社現代新書1761（講談社、二〇〇四、二六四ページ）
- 諏訪哲郎編『現代中国の構図』古今書院、一九八七、二七七ページ
- 藤堂明保『中国語源漫筆』（大学書林語学文庫20301）大学書林、一九五五、一四八ページ
- 橋本萬太郎『言語類型地理論』弘文堂、一九七八、二五七ページ（後、『橋本萬太郎著作集』第一巻 言語類型地理論・文法、同刊行会編、内山書店、二〇〇〇、一五二八ページに編注一六六～一八一ページを附して収録。二九～一九〇ページ、中国語訳…余志鴻訳『語言地理類型学』北京大学出版社、一九八五、二〇ページ）
- 橋本萬太郎『現代博言学』大修館書店、一九八一、四三二ページ
- 橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』（民族の世界史5）山川出版社、一九八三、四七一～三四四ページ
- 橋本萬太郎「中国の南と北」日本大学文理学部「学叢」第三九号、一九八五年二月、一二五～一四七ページ
- 北村甫編『世界の言語』（講座言語6）大修館書店、一九八一、五六二ページ
- 松本克己『世界言語のなかの日本語——日本語系統論の新たな地平』三省堂、二〇〇七、三四二ページ
- 松本克己『世界言語への視座——歴史言語学と言語類型論』三省堂、二〇〇六、四六六ページ

手話の多様性

手話の類型論に向けて

森壮也

(日本貿易振興機構
アジア経済研究所・主任研究員)

言語としての手話を 考えるということ

国連で「障害者の権利条約（UNCRPD）」という新しい条約が二〇〇八年に発効しています。この条約では国連の条約としては初めて手話を正面から取り上げ、第二条の定義の章で「言語」とは、音声言語および手話その他の形態の非音声言語を言う」と定めています。一方で、同じ国連がこの年に宣言した多様性の中の統一、世界的な相互理解を推進するために宣言した「国際言語年」では音声言語のみが取り上げられるという齟齬があったことが知られています。言語なのに時として忘れられたり、無視されたりしてきた歴史を持つ手話、この手話という言語は、どのような言語なのでしょう。今回、この問題について少し考えてみたいと思います。

言語とは音声言語の持つ特性を持つものであるという

人間の誤った思い込みから、手話は長らく誤解されてきました。手話に対して音声言語が培ってきた方法論、つまり言語学の研究が当てはめられることを画期的な仕方です。示したのが、一九六〇年の米国のW・C・ストーカーの研究『手話の構造——アメリカろう者の視覚コミュニケーション・システムの概要』の出版だと言われています。この研究により、手話の言語学的な分析が始まりました。それまでは手話は、ジェスチャーと同じものとみなされ、またひとつひとつの語（サイン）が主たる分析単位であったのですが、この研究が手話の音韻構造を示したことで、手話にも二重分節、つまり語よりも小さい言語的な単位があることを示した嚆矢とされています。

その後、米国の言語学では影響力の大きいMIT（マサチューセッツ工科大学）のN・チョムスキーが手話にも関心を示したこともあり、チョムスキー門下生を初めとして手話の研究は米国の言語学研究の主流に組み

入れられ始めました。これまでの米国言語学会の会長等もその言語学を語る際には、ジャッケンドフの著作 (Jackendoff 1994) にあるように手話への言及がごく自然になされるようになってきています。カリフォルニアにある言語と脳科学の研究で名高いソーク研究所のアメリカ手話研究プロジェクトは、手話が言語であるということを実証する多くの成果を挙げてきています。またワシントンDCにあるギャローデット大学では、米国全土での手話の社会言語学的研究が進められました。その結果、米国の様々な階層やエスニシティ、また地域によって音声言語同様、アメリカ手話も多様な変種を持つことが具体的な形で見出されています。この他、一九八〇年代の革命政権による公教育の開始で、初めてろう学校ができたニカラグアでの手話研究では、手話が言語として成立していく様子が米国の言語学者たちにより実際に観察され、現在も詳細な追跡調査が続けられています。米国だけでなく、欧州でもドイツのハンブルク大学、イギリスのユニバーシティ・カレッジ・ロンドンでは、ろう者の教授を迎えての精力的な手話コーパス・プロジェクトが進んでいます。オランダのラドバウンド大学ナイメーヘン校では、手話の音韻論の研究、イギリスのセントラル・ランカシャー大学 (UCLSAN) では後述の世界各地の手話を対象とした手話の類型論研究も進んでいます。この他に、現在は、オーストラリアのラトロップ大学や香港の香港中文大学など、世界各地で手話の研究拠点が設立されています。こうした世界各地の手話研究

者が一同に集まる場として、TISLR (国際手話学会) も一九八六年以来、世界各地で二年から四年おきくらいの間隔で催され、二〇一〇年にアメリカのパデュー大学で第一〇回目の大会が開かれたばかりです。

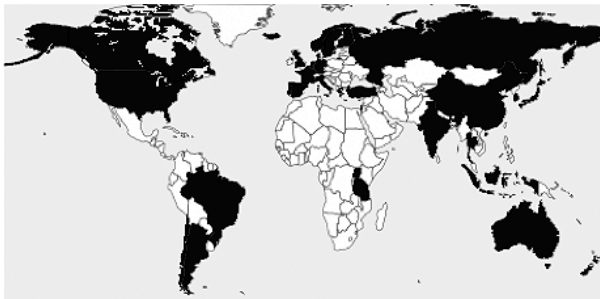
言語のふたつのモーダリティ

ところで、そもそも言語として手話を研究するということは、どういうことなのでしょう。まず手話とジェスチャーは異なるものです。ジェスチャーは各個人で様々に異なっており、言語のようにコミュニティで共有された形式はありません。また屈折のような現象もそこにはありません。一方、自然言語としての手話には複雑な構造があります。さらに、手話は音声言語が世界各地で異なるように各地で様々な異なった手話があります。人間の言語には、その「伝達形式 (モーダリティ)」に使われる経路 (チャンネル) によって、音声・聴覚形式と手指・視覚形式の二種類があります。つまり、音声言語と手話言語ではモーダリティの違いをのぞけば、両者は共に言語として共通する特徴を持つと言えるのです。一方で、こうしたモーダリティの違いゆえに言語的な特性で、両者の間で違いが出てくる部分もあります。さらに同じモーダリティを共有する複数の手話言語の間でも同じ音声・聴覚モーダリティを持つ音声言語が英語と日本語の間で異なる文法形式 (コード) を持つように、異なっています。つまり例を挙げるなら、日本手話とアメ

図① 手話類型論1 UCLANのプロジェクト

対象となった手話

ASL(アメリカ)、Auslan(オーストラリア)、BSL(イギリス)、チリ手話、中国手話、デンマーク手話、DGS(ドイツ)、フィンランド手話、ギリシャ手話、香港手話、アイスランド手話、インドーパキスタン手話、アイルランド手話、イスラエル手話、Kata Kolok(バリ島)、ケニア手話、LSF(フランス)、LSQ(ケベック)、アルゼンチン手話、スペイン手話、ポルトガル手話、LIS(イタリア)、LSB(ブラジル)、レバノン手話、オランダ手話、NZSL(ニュージーランド)、日本手話、ノルウェイ手話、ロシア手話、韓国手話、スウェーデン手話、台湾手話、タンザニア手話、タイ手話、TID(トルコ)、ウガンダ手話、フラマン手話



リカ手話、フィリピン手話、インド手話、ケニア手話は、皆、それぞれ異なった言語です。

つまり言語として手話を研究するというのは、こうしたモーダリティの違いによらない音声言語とも共通する面を理解するということ、そしてもうひとつ同じモーダリティの各手話の間でのコードの違いを理解するということ、この二つが必要になってきます。モーダリティの違いによらない側面には、Meier (2002) が述べているように、①手話も形式と意味からなる構造である、②手話には二重分節がある、③手話にも派生、複合語形成、借用といった言語の生産性がある、④手話にも品

詞、関係節、複文節、語順と動詞の一致といった統語構造がある、⑤赤ん坊が言語を獲得する際の順序も、喃語から一語文、二語文を経て複雑な文に至るという順序は手話でも音声言語と同じである、⑥手話言語も音声言語同様、脳の言語野で処理される言語である、といった面があげられます。

一方、同じモーダリティを共有する手話間での違いについては、近年、手話の類型論的研究が、先にご紹介したUCLANで精力的に進められています。これを今、私自身の研究成果と合わせて紹介して参りたいと思います。図①は、UCLANでこれまで研究の対象としてきた手話について示したものです。

同じモーダリティの言語間での多様性

手話間の違いについて、本日は統語的な違いと音韻論的な違いについてご紹介しようと思います。手話は皆、語順も同じではありません。以下の例に見られるようにアメリカ手話(ASL)はSVO語順であることが知られていますが、日本手話やドイツ手話(DGS)は、SOVです(いずれもThe Man does not buy a bookの意味です)。

ASLの例: MAN NOT BUY BOOK

*MAN BOOK NOT BUY

DGSの例：MAN BOOK BUY NOT

*MAN NOT BUY BOOK

多くの手話は、このSVO語順とSOV語順であることが知られていますが、マダガスカル手話ではOVS語順など他の語順の報告もあります (Minoura 2008)。

次にUCLANの手話類型論プロジェクトの成果であるZeshan (2005) によりながら手話の疑問文と否定文について見てみましょう。手話では疑問文を構成するのに非常に重要な要素としてNMM(非手指文法マーカー)というのがあります。NMS(非手指動作)という言い方もされていますが、最近の国際的な研究場面では前者の言い方の方が増えてきていますので、ここではNMMという言い方を用いることにします。疑問文にはいわゆるYes/No疑問文、つまり極性疑問文(PQ)とWh疑問文、つまり非極性疑問文(CQ)の二種類がありますが、手話でこの二つの疑問文は興味深いことに、多くの手話でPQ/CQのように後者のNMMは、前者のNMMを代替することがあるけれども、その逆はないという研究結果が得られています。またPQとCQについては通常、左のようなパターンが知られています。

PQ——眉あげ、眼開け、話者とのアイコンタクト、頭部(または身体)前屈の組み合わせが多い(インド・パキスタン手話やマレーシア手話、シヤンマー手話、トルコ手話では、眉あげと後方頭位傾斜で示される)

CQ——多くは文全体を通してNMMが付加される。形には幾通りかのパターン(しかしウガンダ手話では、疑問詞にのみNMMが付加する)

日本手話ではPQとCQの動作は、基本は前者は眉あげで後者は眉間にしわを寄せるパターンですが、前者のNMMも使われることがあり、先の包含関係が成り立っています。一方、NMMでは、右のCQのところ述べてられているように、手指の動きに対しどのように非手指部分が付加するかということも大事な要素です。日本手話ですと次のようになります。

日本手話の例：好き 本^Q(どんな本が好きですか?)

∴ PT₂ 名前^Q(お名前はなんですか?)

注：PT₂は二人称の指さし

この最初の例でわかるように日本手話では、CQ疑問文の最後に独立した形でNMMがつくという文が可能です。

これに対し次の例に見られるようにロシア手話、アルゼンチン手話、アメリカ手話(ASL)では、日本手話の最初のもののようなケースはなく、CQ疑問のケースで疑問文全体にNMMが付加されます。

ASLの例：FATHER LEAVE^g

(How does father leave?)

NMMがどのように文の中で分布しているのかは、手話によって様々であり、このことは同時に各手話の構造も様々であることを示していると言えます。

もうひとつ興味深い例として否定文の例を見てみましょう。

UCLANのプロジェクトの対象となったすべての手話で、否定文のNMMは、首振り動作でした。ただトルコ手話では、眉を上げながらあごをあげるといふことは違うタイプのNMMの報告も出ています。否定のNMMでは、大きなパターンの違いとして、次の例のような否定文では、否定詞ではなくもっぱらNMMを用いるDGS、ASL、スウェーデン手話のような事例がまずありました。

ASLの例：INDEX_i OUTSIDE WORK_{neg}
(I do not work outside.)

ところがこれとは異なり、NMMは必要だが否定詞も必須でNMMは否定詞に付加されるという言語もバリエーションのKata Kolokやトルコ手話などで観察されています。

トルコ手話の例：KNOW NOT_{neg}

日本手話では最初のASLなどやトルコ手話とはまた異なり、否定のNMMは否定詞につくのではなく、文末に独立につく形になります。

日本手話の例：仕事 終わる_{neg} (仕事が終わっていません)
仕事 終わる_{neg}

このように手話の否定のNMMのタイプにも言語ごとにくつつかのパターンがあることが理解できると思います。語順や疑問文、否定文の事例を見ましたが、ここで述べてきたように手話の多様性とその類型が見えてくるのではないのでしょうか。

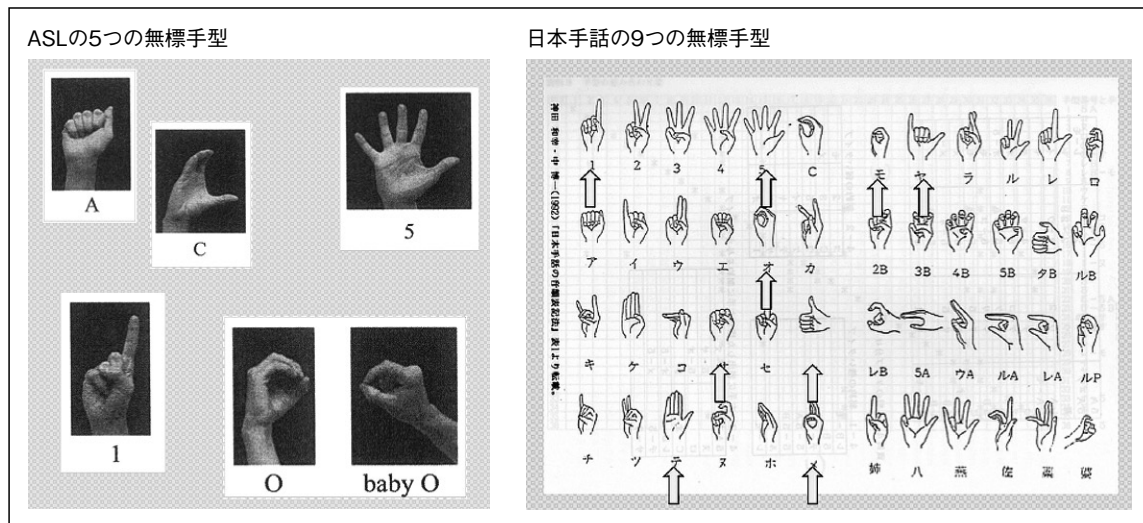
この他、手話ではもつと小さな単位、すなわち音韻のレベルでも各手話で違いが観察されています。これは日本手話とASLで無標手型を比較したものです。無標手型というのは、両手手話で非利き手を取り得る手型でもあり、また赤ん坊が最初に獲得する手型でもあります。

図②の例でも理解できるように日本手話とアメリカ手話では無標手型のパターンが異なっており、総数も日本手話が九つなのに対してアメリカ手話は五つです。図③は、各国の手話での（無標手型のみでなくすべての）手型の分布を分析したRozelle (2003) を元にしたグラフです。手型の分布が必ずしも一律ではないのがわかると思います。

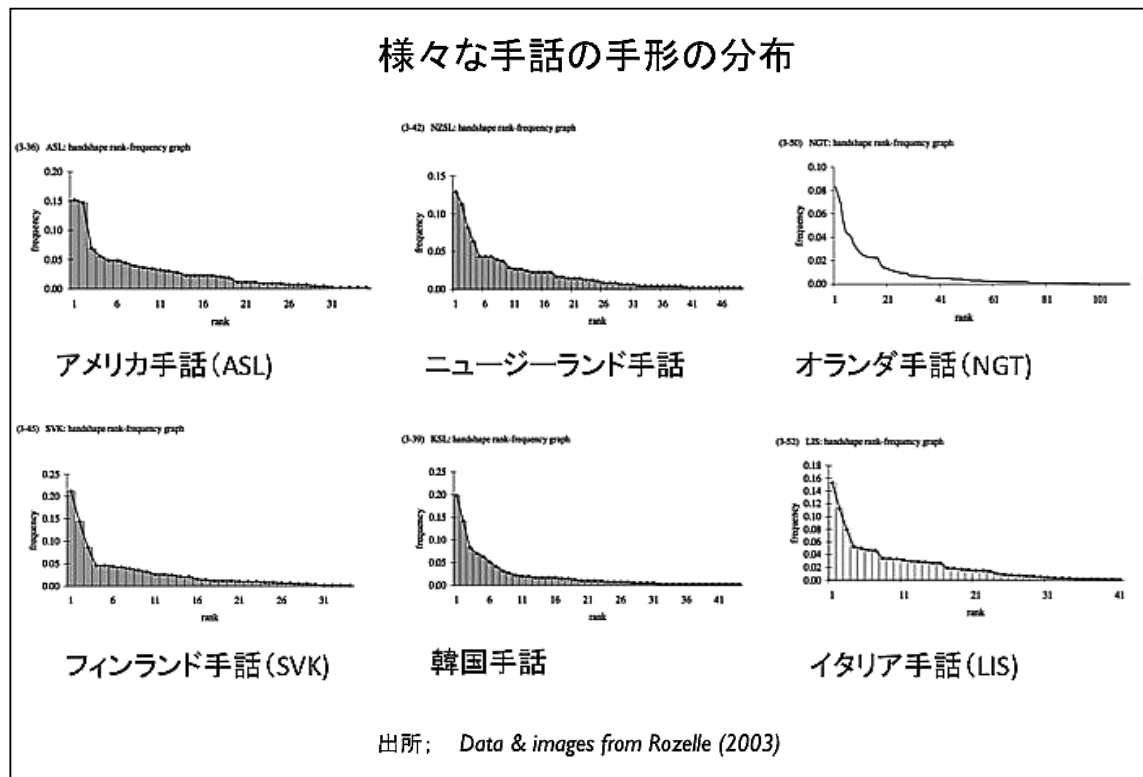
モーダリティが違う 言語の間での類型論的特徴

最後にモーダリティが違うことによって、手話では音声言語と比べてどういった違いが出てくるのかという議

図② 日本手話とASLの音韻



図③ モーダリティが違う言語の間での類型論的特徴



論を、簡単に紹介しておきたいと思えます。Meier (2002) は、手話は、非連鎖的形態論が一般的だが、時として連続的接辞もあるのに対し、音声言語では、連鎖的形態論が一般的で、非連鎖的な形態論を利用することもであると述べています。ここで言う非連鎖的というのは、手話が線形的な仕組み以外も利用できる度合いが大きいこと、つまり空間も利用できることから来るものです。音声言語でも超分節要素などの非連鎖的な仕組みも利用されていますが、手話ではさらに自由度が高いということです。そして、こうしたモーダリテイの違いから、いくつかの手話に共通する類型論的特性として、①代名詞シSTEMの基本的な構成は、話者／非話者で非話者間の区別は空間への指さしで示される、②手話言語の動詞の一致では、音声言語のそれとは逆に主語への一致よりも目的語への一致がより義務的、③英語の前置詞のような空間マーカーを用いる音声言語に対し、手話では手話空間での空間利用が一般的、といった特徴があげられると述べています。言ってみれば、音声言語では不可能な空間の利用が、手話言語の特性ということになります。

こうしたモーダリテイの違いは、手話の音韻構造のモデルにも影響を与えており、Brentari (1999) の手話韻律モデルはその一例と言えます。同モデルでは聴覚認知と視覚認知の違いを踏まえて、音韻表示の仕方も、分節的要素と韻律的要素の間の関係が音声と逆転する関係となっっています。その一方で、同モデルはGoldsmith (1976) の超分節音韻論以降の音声言語の音韻モデルとの統合、

つまり言語一般についての音韻モデルも意図したものとなっっています。

まとめ

これまで手話の多様性ということで、手話の類型論に向けて述べてきたことをまとめてみますと、以下のようになことになるかと思えます。

まず、一九六〇年以來、手話の言語学的研究が世界各地で発展しており、それらの基盤の上に立った各地域の手話の研究が手話の類型論的研究を推し進める原動力になっってきているということです。手話言語の研究の歴史は音声言語の研究と比べるとまだ浅いのは事実です。それでもこうした精力的な研究が進んでるおかげで、手話が音声言語と同じように世界各地でさまざまであるということが具体的なデータで明らかにされつつあります。そして同時に各手話の違いは、語彙はもろろんのこと、音韻、形態、統語のそれぞれのレベルで見られるということも明らかにされつつあります。さらにその一方で、音声言語との間でもモーダリテイの違いを超えた基本的な枠組みでは共通の理解も得られ、文の構造や音韻構造などで言語に共通した特性を明らかにする努力も進みつつあると言えるでしょう。

こうした、人間の言語とは何なのかという基本的な問いに向けての努力がなされていること、様々な言語の違いが産まれることの意味など、私たちの関心を引きつけ

てやまない世界が手話の研究にはあると言えます。このような音声言語の言語学と手話の言語学の対話、これが今後もっと必要ですし、ぜひ行われて欲しいところです。以上、まだまらない話ではありませんが、私からの報告を終えさせて頂きたいと思っております。

【参考文献】

- Diane Brentari (1999) *A prosodic model of sign language phonology*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Goldsmith, John A. (1976) *Autosegmental Phonology*. Doctoral dissertation, MIT. Published, New York: Garland Press
- Jackendoff, Ray S. (1994) *Patterns In The Mind: Language And Human Nature*. Basic Books
- 水光雅則訳『心のパターン——言語の認知科学入門』(二〇〇四)岩波書店
- 神田和幸・中博(一九九一)「日本手話の音韻表記法」『手話学 研究 一二巻』、日本手話学会、三二〜三九ページ
- Meier, Richard P. (2002) Why different, why the same? *Explaining effects and non-effects of modality upon linguistic structure in sign and speech*. In: Richard P. Meier, Kearsy Cormier, & David Q. Quinto-Pozos (eds.) *Modality and Structure in Signed and Spoken Languages*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-25.
- Minoura, Nobukatsu (2008) *Word Order in Malagasy Sign Language (T7M)* 東京外国語大学論集 (Area and Culture Studies) no.77 p.47-69.
- Rozelle, Lorna (2003) *The structure of sign language lexicons: inventory and distribution of handshape and location*. PhD dissertation. University of Washington
- Sandler, Wendy and Lillo-Martin, Diane (2006) *Sign Language and Linguistic Universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press
- Zeshan, Ulrike ed. (2005) *Interrogative and Negative Constructions in Sign Languages*. *Sign Language Typology Series No. 1*. Nijmegen: Ishara Press.

総合討論

人間文化研究機構 第14回公開講演会・シンポジウム

ことばの類型と多様性

コメント

角田 太作

(国立国語研究所・教授)

菊澤 律子

(国立民族学博物館・准教授)

パネリスト

窪園 晴夫

(国立国語研究所・教授)

大堀 壽夫

(東京大学大学院・准教授)

ブラシヤント・
パルデシ

(国立国語研究所・准教授)

太田 斎

(神戸市外国語大学・教授)

森 壮也

(日本貿易振興機構
アジア経済研究所・主任研究員)

司会

長野 泰彦

(国立民族学博物館・教授)



コメンテーター、パネリストたち

長野 ただ今から総合討論に移りたいと思います。今まで五人の先生方からお話を伺いました。時間的に十分でなかった面もあるかと思いますが、これからコメントをしてくださるお二方も加わっていただき、その辺も補っていきたいと思います。

はじめにコメントをしてくださる先生をご紹介します。

私の隣にいらつしゃいますのが国立国語研究所の角田太作先生です。角田先生は長く東京大学におられまして、一昨年から国立国語研究所に移られました。専門はオーストラリアの原住民語なのですが、先ほど私がイントロのところで少し触れた能

格という問題、その類型に関して日本で非常に早く、先駆的に研究してこられました。

その隣が国立民族学博物館の菊澤律子さんと、専門はオーストロネシア系の歴史言語学です。実はこの七月に国立民族学博物館で国際歴史言語学会を外国から三〇〇〜四〇〇名の参加者を得て開催することになっておりますが、その実行委員長であり、かつその学会の会長をしております。

進め方としまして、コメントーターのお二人からそれぞれコメント、あるいは質問をしていただき、それに対する発表者が答えるという形で進行さ



長野泰彦氏

せていきたいと思います。それでは、角田先生からお願いたします。

音の高低・強弱・動詞の数、サインランゲージ

角田 角田です。あまり大したコメントはできないのですが、思いついたことをいくつかお話ししたいと思います。

まず最初に窪蘭晴夫先生のご発表について、コメントというよりただの感想です。皆さまご存じのとおり、

窪蘭先生のお話にもありましたように東京のことはなどでも、音の高さで単語を区別することがあります。例えば「かき(牡蠣)」と「かき(柿)」です。東京のことはだったら、八百屋さんで買うのが「かき(柿)」で、魚屋で買うのが「かき(牡蠣)」で

すね。このように日本語には、音が高いか低いかで単語を区別する場合があります。英語では音が強いかわ弱いかで区別する場合があります。例えば中学、高校のころ英語の授業で、invalid は病人ですが、invalid と言うと書類や法律が無効、というような



角田太作氏

意味の違いを習った記憶があります。窪蘭先生から伺ったように、日本語でも方言でそういうのがあるそうですが、私の調べたオーストラリアの言語では音の高さでも、また強さでも区別することはありません。いくら探してもそのようなペアは見つからないのです。例えば東北部のワロゴという言語で「男」という意味の単語は、「Bana」¹と言っても「Bana」と言っても、多分「男」という意味にしかならないと思うのです。

日本語では高さや低さで、英語では強い・弱いで区別しているように、オーストラリアの言語では高さでも、

また強さでも区別しない。不便ではないかと思うけれど、意外と不便はしていない、それで十分生活しているということですよ。

また、最初に世界各地で言語が消滅しかけているというお話がありましたが、実はオーストラリアの伝統言語、オーストラリア原住民語もそうなのです。お話しした東北部のワロゴという言語を私は一九七一年から七四年まで調査しましたが、最後の話者が一九八一年に亡くなりましたので、八一年に消滅してしまっただけです。私は東北部でワロゴという言語を調べ、西北部ではジャロという言語を調べました。ジャロという言葉も話者は五〇人いるかどうかです。から、本当に消滅しかけています。以上が窪蘭先生についての私の感想です。

次の太田齋先生のご発表は、中国の漢語の諸語を含めて、アジア大陸を北の方から南の方へ行くに従ってだんだん性質が変わってくるというお話だったと思います。実はオーストラリアでも同じようなことがあります。例えば、動詞の数です。私の研究とほかの方たちの研究を読んでいますと、どうも大陸の東の方は動詞の数が多くて、西の方へ行くに従っ

て動詞の数が減るようです。私が調べた言語の東のワロゴ語では、動詞の数を正確には調べておりませんが、楽に一〇〇以上あります。私の集めた単語は全部で二五〇〇ですが、そのうち多分一〇〇〜一五〇ぐらい動詞があるだろうと思います。集めて記録した単語一五〇〇にしては多い方だと思います。

ところが、西の方のジャロ語は動詞がわずかに四〇しかありません。どういことが起こるかという話です。例えば東の方では「見る」という動詞が「ニヤガン」、「聞く」という動詞が「カワン」。「見る」と「聞く」で別の動詞です。西の方のジャロ語は動詞が少ないのですが、「見る」という動詞は先ほどの似て「ニヤガン」ところが「聞く」はボラニヤガンで、「見る」という動詞の派生語なのです。皆さんは「ええっ」と思うでしょう。「聞く」なんていう基本的な動詞がなく、「見る」という動詞の派生語を使っていくから。というわけで、東の方から西の方へ行くに従ってだんだん動詞の数が減っていくという、先ほどのアジア大陸の話と似ているかなと思いました。

最後の森壯也先生のご発表は手話

自分の常識だけが 常識ではない

窪園 私の話では、「かき(牡蠣)」「かき(柿)」「みたいな区別がない言語もある」というのは当然のことです。東京方言であつても、標準語であつても、「あめ(雨)」と「あめ(飴)」は区別しませんが、「くも(雲)」と「くも(蜘蛛)」は区別しませんが、空の雲も虫の蜘蛛もアクセントで区別しなくて、それで何の支障があるかという、何の支障もないのです。文脈がある程度決めてくれます。

それにつきましてはたくさん研究があります。東京も関西もそうですが、けれども、同音異義語といわれるもので、「あめ(雨)」と「あめ(飴)」のようにアクセントで区別されているものは一〇〇の中の一五パーセントしかないのです。あとの八五パーセントは「くも(雲)」と「くも(蜘蛛)」のように区別していません。ですから、アクセントは単語を区別する機能を主に担っているわけではありません。英語ではその機能はもっと低く、〇・五パーセントといわれています。先ほど *invalid* と *invalid* を例に出されましたけれども、そのよう

のお話でした。サインランゲージです。実はオーストラリアの諸言語にもサインランゲージがありました。オーストラリアの場合は、健常者が使っていたようです。ちゃんと文を作れるようなサインランゲージであつたかどうか分かりませんが、いろいろな記号がたくさんあつたようです。

どのようなときにそのサインランゲージを使ったかと言いますと、狩りに行ったときです。狩りに行ってカンガルーがいたとき、一緒にいた人に「おーい、あそこカンガルーがいるぞ」などと大きい声で言ったらカンガルーは逃げてしまいます。そのときはサインランゲージで知らせたそうです。あとは、言葉が発してはいけない神聖なお祭りのとき。サインランゲージでお互いに連絡を取りながら、お祭りをしたと聞いたことがあります。

私自身も一九七五年か七六年に、西北部のジャル語の人たちのサインランゲージをビデオに撮りましたが、いくつかの記号を録音したのですが、二つだけ例を挙げます。先ほど森先生のお話疑問文のことがありました。ジャル語などですと、疑問のマークは指がこうなつていて、これが疑

問の印です。これはいろいろな疑問があります。「どこへ行くんだ?」「あるいは「元気か?」「誰かが狩りから帰ってきたら「何か捕まえたか?」など、ほかにもいろいろな疑問があります。

また森先生のお話には、指や眉毛を使つたり、あごを上げたりという話がありました。サインランゲージにも唇を使うものもあり、唇で方向を示すのです。例えば、あつちに人がいたら、こうやって聞きます。「どこへ行くんだ?」というつもりで聞いたら、答える方は唇で「こつちへ行きます」と言うのです。あるいは、こうすれば「こつちへ行きます」となります。手や指も使いますが、唇を使うものもありまして、実際に私がビデオで記録したサインランゲージの例です。

私のコメントは以上です。思いついたことしかお話しできなかったのですが。

長野 どうもありがとうございます。今コメントがありました。それぞれお名前の拳がった先生で言い加えるべきことなど、おありでしょうか。窪園先生、いかがですか。



窪園晴夫氏

にアクセントで区別しているものとはほとんどありません。そういう意味で、アクセントは単語を区別する機能をほとんど持っていないのです。

では、何を持っているかというと、単語と単語の境を決める機能です。そのために今日、私は「そんごくう」と「そんごくう」という例を挙げました。「そんごくう」というのは一つにまとまっているけれども、「そんごくう」というのは二つ山が表れます。アクセントは「語か二語かをはつきり表わす機能を持っているわけですね。ところが、方言が出てくるとその常識が通用しないのです。

甌島方言では、「そんごくう」と「そんごくう」の両方とも山が二つ表われているけれども、「ん」のところが高いか低いかで区別されます。

もう一つ例を挙げますと、「朝、ご飯食べますか」と「朝ご飯、食べますか」というのは二つ意味があります。「朝はライスにしますか」という意味と「朝ご飯を食べますか」という意味です。これも東京では「朝、ご飯」と二つに分けたら朝とご飯ですし、「朝ご飯」と言ったらブレックファーストのことです。アクセントの区切りで区別できるわけですが、甌島はそのような区別の仕方をしないのですね。「朝ご飯」の出だしの「あ」が高いか低いかで区別するのです。そうになると、もう聞いていてもさっぱり分かりません。

今ちょうど宮崎県の都城に灰が降ってきて、地元の人を放送しています。それをご覧になると、単語が全部、最後が高いのです。彼らはフランス語みたいだと自慢していますけれど、「アメリカ」「ドイツ」「フランス」のように、全部フランス語みたいに最後が高くなって、何の区別もないわけです。もちろんそこでもアクセントの区別がなくて日常

生活で支障が生じることはないのですが、それでも切れ目を表わすという機能はあります。そういう意味で、今日、私がお話ししたかったのは、方言が混じると自分の常識が通用しないということです。標準語の常識も、あるいは関西弁の常識も通用しないということがたくさんあるということです。

もっと分かりやすい例を示しますと、今日はアクセントの話でしたけれども、アクセントは耳が良くないとなかなか分かりませんが、単語だとよく分かります。例えば、私が関西に行つて面食らったのは「お肉」ということばです。「お肉を買ってきて」と家内に言われて豚肉を買って帰ったのですが、そうしたらかんかんに怒られました。なぜかと言いますと、関西で「お肉」と言うとき牛肉しか指さないのですね。豚肉は「豚」と言うのです。ところが私の鹿児島語彙では、「肉」と言えば豚肉と牛肉のことで、両方とも肉屋で売っています。鳥はかしわ屋に売っていますから、かしわはまったく別の物で、私は鶏肉を絶対に「肉」には入れない。ところが東京の方に聞くと、寄せ鍋などでは鶏肉であっても「肉」で構

わないと言って、地域によって同じ「お肉」と言っても意味が全然違ってくるのです。

それと似たような問題がアクセントにも出てきて、方言が混じってしまうと、同様の誤解が生じます。そのことを私たちはいつも念頭に置いておかなければいけないと思います。自分の常識だけが常識ではないのだということ強調したかったのです。

言語の地理的推移

長野 ありがとうございます。

次にコメントが出ましたのは太田先生についてで、動詞の数がオーストラリアで偏りがある、例えば「聞く」と「見る」とで起こっているようなことです。漢語でも、基本的にはチベット語もそうだったのかもしれないが、「売る」と「買う」は同じ語彙ですよ。それを別の何かで補って区別しているのです。橋本萬太郎先生は、この手の話をあまり直接はなさらなかったような気がするのですが、一つは、角田先生が指摘されたことが漢語の世界でもあるのかということ。もう一つは、橋本先生が主張している「言語類型地理」は、「地理」

がくつつくところのみそなわけで、それが北方語からタイ語までつながってきます。そのところを補足を兼ねてお話しただけませんか。

太田 まず最初の問題です。「売る」と「買う」というようなものは過去、六朝の三々四世紀ぐらいまでですと、どうも声調の読み替えて品詞の分類をしたという形態変化のような手続きがあったのではないかと言われていますが、今はまったくありません。ただ語彙的には、例えば「数」という字を挙げて、「shu」と「su」というように上がり下がりが違うことによって品詞が違ってくるとか、「量」も「liang」と「liang」で違うというような、かつての形態変化の痕迹らしき例があります。これは名詞と動詞ですが、同様に使役というか、他動、自動でも、例えば王である、王たるという場合は「wang」と言うのに対し、「wang」とやると「王たらしめる」という形になる。声調の読み替えによって自動、他動を区別するというような現象もあったようなのです。しかし、それがなぜか今はないのです。それがなぜなくなったのか



太田齋氏

はよく分かりません。

先ほどの動詞が地理的な推移で漸次多くなる、少なくなるということ、中国語に関してはちよつと言えないのではないかと思います。ただ、一般的に言って、先ほどの話と関係しますけれども、北へ行けば行くほど音節構造が単純になっていきます。ですから、区別可能な音節数は北へ行けば行くほど少なくなります。声調の数も少なくなります。これは二ワトリが先か卵が先かというようなことになるのですが、結局、北ですと同音異義語が増えるということになりますので、それを回避すべく北

の方が複音節語が多くなるということとは言えます。そうになると、南に対して北の方が、より分析的な表現形態になるということはあるかもしれませんが。その一環で、今の「聞く」が「見る」の派生でというようなところまでは行かないと思うのですが、中国語でも北と南で音節構造の簡素化を契機とした形で分析化する、分析する傾向が出ているかもしれません。しかし、それはよく分かりません。

地理的な推移ということでは、一番典型的に見られるのは声調の数です。橋本萬太郎先生の説で、言語類型地理論というものは類型の特徴の地理的分布から言語構造の歴史的推移をたどるという方法論です。

アルタイ諸語は、モンゴル語と同系の言語や、満州語などのツングース語、そしてトルコ共和国の言語および同系の言語を総称したチュルク諸語といった言語です。北にアルタイ山があつて、そのアルタイ山脈を中心に活動した遊牧民族の言語をひつくるめた形でアルタイ諸語といえます。だいたいこの系統の言語は日本語と同じような語順で並んで、声調がありません。日本語と語順的には同じで、一対一の逐語訳が可能なよ

うな言語です。それに対して、橋本先生は声調を持った言語、恐らくタイ諸語、あるいはタイ・カダイというようなグループとして認識されている言語のことを頭に置いたのだと思うのですが、そういう二つの言語グループの間であつて中国語は、南の方の例えば広東語ですと九声、声調が九つあり、中間段階の長江下流辺りでは七つ五つ、さらに行きますと北京語では四つです。中にはもうちよつと北、あるいは西北に行くところとか二つとか、あるいは文音調でもあります。ただ、そうは言っても別の字とくつついたときには違いがあるというのがちよつとややこしいのですけれども、そのような声調の区別の仕方もあります。それを大局的に見ますと、南の声調のある言語と北の声調のない言語の間で、その区別の数が漸次推移していくという地理的な特徴が見られるということです。それはSOV、SVOというタイプの類型特徴に関しても、やはり同じように言えるのではないかとこのとです。

大ざっぱな言い方ですけれども、ある地域ではこの方言が、川を一つ

越えれば別の方言がというふうには截然と分かれるのではなくて、大局的に見れば、それが漸次じわじわと段階的に変わっていくような変異体として中国語の方言を見るべきではないかというのが橋本先生の考えです。では、その本質は何かということでは、困るのですが、そこで今日ご紹介したのが岡田英弘先生や松本克己先生の仮説です。橋本先生はそこまで言っておられません。そこは周到に回避して、一貫してコメントを差し控えておられるように思います。

手話の公用語について

長野 どうもありがとうございます。三番目のコメントは森壮也先生に対してだったと思いますが、私自身、手話に関してまったくの無知で、目からうろこでした。大変恥ずかしい次第です。ただ、結果として国立民族学博物館が言語展示を更新したとき、基本的な態度として手話を自然言語の一部として位置づけ、それなりの対応をしたのが正しかったということだけはよく分かって、安堵いたしました。

森先生に非常にプリミティブな質



森社也氏

間で恐縮ですが、手話に関する国際学会があるようですけれども、そこではどのようにコミュニケーションをされるのですか。

森 手話の国際学会の中で使う公用語について、ご質問をいただきました。確かにこれは大きな問題です。聞こえる皆さん、聴者の皆さんが一般の国際的な学会でどういったことを使われるかということを考えると、音声の方では恐らく英語と思われる方が多いと思います。リングフランカと言いますが、手話の場合、ろう者の場合の音声での英語に当たるようなリングフランカは何か、実際にそ

れをどうするかということで、ろう者間でいつも議論になっております。

先ほども少し触れましたが、昨年一〇月にアメリカのパデュー大学で国際的な手話学会が開催されました。ノーベル賞を取った先生もいらっしゃる有名なところですが、そこで学会が開催された際、公用語は三つありました。アメリカ手話、イギリス手話、そして国際手話です。

この三つがどういうものかご存知ない方もいらっしゃるかと思います。アメリカ手話とイギリス手話と別々に言いましたが、音声言語の場合ではイギリスとアメリカ、イギリス英語とアメリカ英語は若干の語彙の違いがあつても、基本的にはお互いに意思の疎通が可能です。ところがイギリス手話、アメリカ手話はまったく違う言語なのです。アルファベットを手を使って表わす方法がありますが、それもアメリカ手話とイギリス手話ではまったく異なっています。ですから、この二つは別のもので、区別が必要です。

先ほど角田先生のコメントの中で、オーストラリアでは聞こえる人が身振りのな手話言語を使っている、それをサインランゲージとおっしゃって

いたかと思えます。一般の手話を知らない言語研究者、聴者の中では、大抵サインという言い方が多いのですね。先ほどのようにサインランゲージと使ってくださいる方はほとんどいないのです。

ところが先の三つ目の公用語である国際手話は今、「インターナショナルサイン」と言つて、「ランゲージ」と付いていないのです。これは、いわゆるランゲージではなく、表面的にその場だけで意思の疎通が図れる言葉ということで、国際手話「インターナショナルサイン」という言い方をしています。専門的な内容を語るには、国際手話では十分ではありません。ただ、アメリカ手話、イギリス手話の両方ともお分かりにならない方がたくさん参加していると話が進まない、そこでやむを得ず国際手話も取り入れるというわけです。ですから、会議のオフィシャルな言語として、メインはアメリカ手話、イギリス手話ということになります。

それから、音声言語の中では英語が公用語というのと同じような意味で、手話の場合、何が公用語になるかということで、冒頭の問題に戻ります。四年に一回、国際的にろう者

が集まる国際的な世界ろう者会議があります。また、つい最近、ろう者のデフリンピックというスポーツ大会がスロバキアで開催される予定だったのですが、直前になって中止になったという記事を新聞などでお読みになった方もおられるかと思えます。これもうろ者の世界的な集まりの中の一つなのです。そのような場でどう

いったものが公用手話として使われるのか、まだ決まったものはないけれども、こちらでは、あえて言えば、先ほどの三つ目のサインと言われている国際手話です。しかし国際手話というのは確立された文法があるわけではありません。先ほど太田先生のお話にピジンについてのお話があったと思いますが、この国際手話につい

主語、語順のこと

菊澤 民博の菊澤でございます。私からは大堀壽夫先生とプラシヤント・バルデン先生のお話に対するコメントです。

まず大堀先生からは、私たちが中学校で英語を習ったとき、最初に習った主語という言葉について、何も考えずに日本語の主語、英語の主語、どちらも文の最初にくるんだな、と思ってきましたが、実はその分析にも多様性があるという、とても専門性の高い内容のお話をしていただきました。主語に関わる要素には意味、構文、機能、いろいろな面があって、

それが言語によって詳しく見ていくと違うというようなお話と、それを専門的に類型化、パターン化していくにはどうしたらいいのかというご提案があったと思います。大堀先生のお話のご趣旨からは一歩後退してしまうかもしれませんが、その中の意味的な側面につきまして、取りあえず「私は」とか、英語で「I」というときの主語、何となくの主語ですけれども、それを見るだけでも世界の言語にはいろいろあるというようなことを、今日はコメントーターとして角田先生もおみえになっていま

てはピジン状態と言っていていいと思います。ランゲージまで到達していないのですね。以上、少し参考になりましたでしょうか。

長野 ありがとうございます。

それでは、二人目のコメントーターの菊澤さん、お願いします。



菊澤律子氏

すので、ご質問させていただきながらコメントしたいと思います。

私たちは中学校で、日本語だと「私は花子をぶった」のように主語、目的語、動詞という語順が、英語の場合には先に動詞が来て、目的語が最後に来ると習いました。しかし、世界全体の言語を見て、どちらの語順がパターンとしては多いとお思いになりますか。英語パターンの動詞、目的語だと思われる方は手を挙げてみてください。では、日本語パターンで主語、目的語、動詞だと思われる方。ありがとうございます。角田先生、いかがでしょうか。

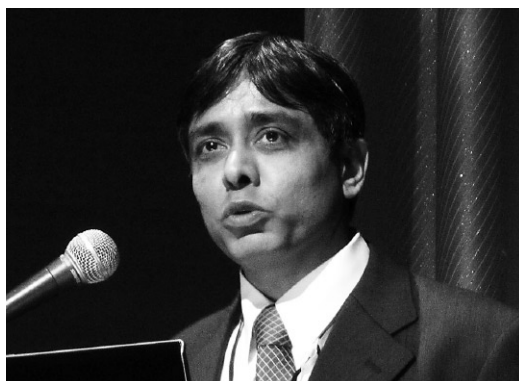
角田 主語は何かという難しい問題ですが、簡単に言って、例えば「花子は本を読んだ」、この「花子」を主語とする、「本」を目的語とする。英語で「Mary read a book」で「Mary」が主語、「book」が目的語であると単純に考え、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中米、南米、太平洋、大洋州の約一三〇の言語で見ますと、私の記憶なのですが、約四〇パーセント（実は約四四パーセント）が日本語型です。英語型は約三〇パーセント（実は約三九パーセント）です。つまり、ややではあります。日本語型の方が多

数派です。パーセントで見れば、日本語型が一番多いということになります。

菊澤 ありがとうございます。では、その主語が文の一番最後に来る言語は何パーセントぐらいか覚えていらっしゃいますか。主語が文の最後に来る言語です。

角田 ものすごく少ないですね。私の記憶ではアフリカの東海岸にあるマダガスカル島のマラガシが動詞、目的語、主語で、「読んだ、本を、花子が」という順番です。一三〇のうち、今ぱつと思いつくのはマラガシだけです。

菊澤 ありがとうございます。ここからが私のコメントになります。私は先ほどご紹介いただきましたように、太平洋の言語を専門としております。太平洋の言語は一二〇〇言語と言われていますが、その大多数が動詞で始まる言語で、最後に主語が来ます。ということ、世界七〇〇〇言語にはいろいろな言葉がありますので、もしご興味があったら語順のこともちよつとご覧になってみてください。次にブラシャントさんに伺いたいと思います。マラーティー語は、私の記憶が正しければ日本語と語順が同じでしたよね。日本にいらっしやっ



ブラシャント・バルデシ氏

日本語を学ばれたとき、語順が一緒だったから学びやすかったのかなというところもあるし、先ほどおっしゃっていた他動性、自動性など、気が付かれたところも、違うなと思われたところもあると思うのです。もし今ここに座っている日本語話者の私たちがマラーティー語を学ぼうとしたとき、一番苦勞しそうなことと、一番楽にできそうなことを教えていただけないでしょうか。日本語とマラーティー語は、どのような面が似ている、どこがすごく違うのかがわかると思いますので。

バルデシ マラーティー語という言



大堀壽夫氏

葉はインド・ヨーロッパ語族の言語です。日本の皆さんが苦しむのは、名詞の性だと思います。マラーティー語はインドの中でサンスクリット語と同じように男性、女性、中性という三つの性を残している言語です。ですから、インド人のほかの言語話者でも、マラーティー語を学ぶとき苦労するのが中性名詞です。「私は紅茶を飲んだ」「コーヒを飲んだ」「牛乳を飲んだ」の中で、「紅茶」は男性、「コーヒ」は女性、「牛乳」は中性ですので、何を飲んだのかによって文語話者以外は非常に苦しいです。私

は幸せだと思っております(笑)。

また、一致現象、つまり主語と動詞が一致するという点でもマラーティー語はさらに複雑で、完了形になった場合、例えば紅茶を飲み終わった場合には目的語と一致します。「飲んでる」と進行形にすると、主語と一致します。これは日本人にとつてはもう一つ、難しい点です。易しいところは語順が同じだという点です。

菊澤 ありがとうございます。次に、森先生にも同じ質問をしてみてもよろしいでしょうか。日本語と日本語の二つは異なる言語だということ。今日はじめて認識された方も多いと思うのですが、日本語の話者でおられる森先生に、もし私たちが日本語を学ぶとしたらどこが一番難しく、どこが学びやすいのかを伺ってもよろしいでしょうか。

森 ご質問ありがとうございます。今日はフロアに手話教授法のスペシャリストのろう者の先生が見えておられます。その方の方が私よりずっと知識があるので代わってお答えいただきたいぐらいなのですが、私から簡単に答えさせていただきます。

一般の方が手話を学ぶ際にもっとも苦労することと申しますと、二点

あります。一つ目は、今日の私の講演の中で言った手以外の動きであるNMM(非手指文法マーカー)、主に顔の動きです。聴者は普段、音声言語を使うときそのようなところを使いませぬので、顔の動き、眉上げなどの習得がなかなか困難です。

それから、もう一つは、今日はお話をしましたが、CLと言われるものです。例えば物の形状、机の板の様子とか物の形などを表わすのをCLと言いますが、CL表現も文法の中の一つです。語彙固定されない表現ですので、このルールを身に付けるのが非常に難しいです。主にこの二つだと思います。ですから、講師陣はいつもそのあたりで苦労されています。

生きたデータ

長野 どうもありがとうございます。ちょっと戻りますが、大堀先生、何か付け加えることはございますか。

大堀 おもしろそうな話を菊澤先生がしてくださったので、特に新しく付け加えることはないのですが、主語と思われるものが最後の位置に表われる言語は確かに少ないですね。

オーストロネシア系のほかに、ブラジルの少数言語にヒシュカリヤナという言語があつて、南米のカリブ語族と言われているこの語族は意外とOVSが多いそうです。

ただ、そういったものを見た後で、この手の授業をするときによくクラスで言うのですが、「すごく珍しそうに見えるでしょう。でも、会話データを調べてみましょう」と日本語の会

話を見ると、主語が最後に来るのは全然珍しくないのです。だから、OVSみたいなものが、例えば「太郎がりんごを食べた」と言う代わりに「りんごを食べたでしょう、あなた」など、いくらでもあるのです。そう考えると、いわゆる生きたデータをみるということ、もつと地に足の着いたデータから見えていくということとは、今日私がしたような一般的に向かう

ような研究であつても、実はすごく大事なだと日々痛感しております。**長野** どうもありがとうございます。ちょうど時間のようですので、本日の発表と総合討論はこれで閉じさせていただきます。今後とも人間文化研究機構のシンポジウムを大事に、またかわいがつていただきたいと思います。お待ちしております。どうもありがとうございます。

閉会のあいさつ

影山太郎 (国立国語研究所長)

国立国語研究所の影山でございます。国立国語研究所は二〇〇九年一〇月から人間文化研究機構の一員になりまして、日本語、国語の基本的な研究、それから外国人に日本語をどう教えるかという日本語教育の研究を行っています。それだけではなく、今日もお話がありましたようなものも幅広く、世界の言語から見て、日本語がどのような性質を持っているか、内から外から、さまざまな角度から日本語を見るという多角的、総合的な研究を推進しています。

今日のシンポジウムのテーマは「ことばの類型と多様性」でした。類型というのは似ている点、共通点です。多様性はそれぞれの個別性、独自性です。この二つは一見矛盾しているようですが、私たち人間のことはその二つをうまく組み合わせ、非常に長い年月をかけて今日のように発達してまいりました。今日の講演から、音声の面、文法の面、意味、語彙の面において、そして手話の面においても、多様性と類型があるということが分かりました。

このように言語というものは類型的な特徴、共通性と個別性、多様性を持っています。これに関してこれからますます研究していかなければいけません。ここで持ち上がる疑問は、ではどうして言語に類型と多様性があるのかということです。このことを深く追求すると、言語の普遍性、英語で言うユニバーサリティという問題になってまいります。

アメリカの言語学者ノーム・チョムスキーは「人間だけ

が言語をしゃべれる。チンパンジーそのほかの高度な霊長類でも、人間言語のような高度な情報システムを持っていない。よって人間だけに独自の言語を司る遺伝子が、代々おじいさんから子、さらに孫へと引き継がれてきたのではないか」という仮説を立てました。遺伝子の研究は言語学者ではなかなか手の及ばないところでしたけれども、数年前にイギリスの方で、何代かにわたって言語障害を引き起こしているという家族が発見されました。その家系を調べてみますと、遺伝子にFOXP2と呼ばれているものがあった、それが欠けているために言語能力がうまく伝わっていないということが分かりました。このFOXP2というものが機能することで言語能力も発揮されるということが発見され、チョムスキーの仮説が立証されたのです。

それでは、そのFOXP2は一体どこから来たのか。人類がアフリカ中東部のビクトリア湖の辺りに発生したのが今から五〇万年くらい前だと言われています。オックスフォード大学の進化人類学の研究者によれば、言語らしきもの、言語と呼べるものを獲得したのは今から二〇万年前だそうです。人類が発生したのは五〇万年前で、それから三〇万年たって、二〇万年前に言語が獲得されたというわけです。

そして、初期人類はアフリカを出て行きます。アフリカを出て、世界各地に散らばり始めたのが今から一〇万年前で、ヨーロッパの方にたどり着いたのが四万年前です。チベッ

ト・インドを通過して、南のオーストラリア大陸にたどり着いたのが七万年前。もう一方は中国・シベリアの辺りを通して北上し、シベリアに着いたのが三万年前で、さらにベーリング海峡を渡って北米大陸に着いたのが二万五〇〇〇年前です。さらに北米大陸から南下して、メキシコを通り中米、南米に行ったのが二万年前と言われています。

そうしますと、すでにアフリカを出たときから人類はことばを持っていたということです。ですから、現在の六〇〇〇の言語に多様性がある、類型的共通性があると言っても、ある意味では当たり前かもしれません。もともとは同じ発生だったからです。しかし、実はそんなに単純なものではないでしょうね。それぞれ行き着いたオーストラリアならオーストラリア、シベリアならシベリア、南米なら南米でそれぞれの文化を築くとともに、言語の方も独自の発達を遂げました。

私たち言語学者は、古い言語でも記録が残っている部分は研究しませんが、歴史の記録のない、文字の記録のない言語はこれまでは研究をあきらめていた、意図的に遠ざけていたという部分があります。それは一つには、一八六六年のバリ言語学会で言語の起源を論じる人がたくさんいて、荒唐無稽な説がたくさん出たため、そんなもの

は一切受け付けないとバリ言語学会が決断した。それが言語学の専門家にいまだに残っているのです。ところが欧米では言語学者だけではなくて、進化人類学、脳科学、生理学、神経生理学、そして考古学ももちろんです。さまざまな分野の人が学際的に協力し合っていて、人類の誕生および言語の起源について検討し始めています。

日本では言語学は言語学、という壁があるような気がします。今日は民博と国語研で連携して少し壁を取っ払うことができました。さらに将来、もしこのような言語学のことをお話しする機会がございましたら、そのときはさらに学問の枠を取っ払って、進化人類学とか考古学とか、社会学、あるいは場合によれば（人間の言語は音楽、歌から発したのではないかという説がかなり有力になって来ていますので）、音楽学も含め、学際的にいろいろな研究報告ができればと思います。

長丁場で皆さんお疲れだと思えますが、非常に楽しい有意義な機会を持つことができました。今後とも人間文化研究機構の活動にご支援いただきますようお願いいたします。閉会の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

長野泰彦 (ながの やすひこ)

国立民族学博物館・名誉教授、2011年4月より総合研究大学院大学・副学長
カリフォルニア大学(バークレイ校)大学院言語学部博士課程修了、Ph.D.。東洋文庫研究員、カリフォルニア大学(バークレイ校)東洋語学部(チベット語)講師を経て1980年より民博。国立民族学博物館・教授(1995)、総合研究大学院大学文化科学研究科長(1998-99年度)、国立民族学博物館・副館長(2003-04年度)、人間文化研究機構・常任理事(2005-2007年度)。
■専門分野……チベット・ヒルマ諸語の歴史言語学

窪 蘭晴夫 (くぼの はるお)

国立国語研究所・教授
エジンバラ大学大学院博士課程修了(Ph.D. 言語学)。南山大学外国語学部・助教授、大阪外国語大学(現・大阪大学外国語学部)・助教授、神戸大学大学院人文学研究科・教授を経て、2010年4月より国立国語研究所理論・構造研究系長、教授。カリフォルニア大学およびマックスプランク心理言語学研究所・客員研究員(1994-1995)。
■専門分野……言語学(音韻論、音声学)。主に日本語の音声を対象に、言語構造の普遍性と個別性を研究している

大堀 壽夫 (おおほり としお)

東京大学大学院・准教授
カリフォルニア大学(バークレー校)大学院言語学科博士課程(1987-1992)、Ph.D.。慶應義塾大学商学部・助手(1985-1992)、助教授(1993)、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻(1994-現在)。
■専門分野……言語学(意味論、機能的類型論、談話分析)、特に接続構造の類型と文法化に関心をもっている

プラシャント・パルデシ

(Prashant Pardeshi)

国立国語研究所・准教授、2011年4月より教授
Jawaharlal Nehru 大学日本語学科修士課程卒業、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程修了(取得学位:博士(学術))、東北大学大学院国際文化研究科21世紀COEプログラム(人文学)「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」外国人研究員(2003.10.1-2005.3.31)、神戸大学大学院人文学研究科・専任講師(2005.4.1-2009.9.30)を経て、2009年10月より国立国語研究所 言語対照研究系・准教授。
■専門分野……言語学(言語類型論、対照言語学)

太田 斎 (おおた いつく)

神戸市外国語大学・教授
東京都立大学大学院人文科学研究科中国文学専攻修士課程修了(文学修士)、東京都立大学人文学部・助手、神戸市外国語大学・講師、同助教授を経て、1993年より教授。2009年より学術担当理事を兼任(2011年3月まで)。
■専門分野……中国語方言の比較研究、及び、少数民族語及び周辺の異系統の言語をも研究対象として、地域的特徴、類型の特徴の成立要因についても考察

森 壮也 (もり そうや)

日本貿易振興機構 アジア経済研究所・主任研究員
早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了(経済政策論専攻、1987.3)、アジア経済研究所入所(1988)、2005年よりアジア経済研究所新領域研究センター貧困削減・社会開発研究グループ長代理、主任研究員、同研究所開発スクール・教授。東京大学先端科学技術研究センター・特任研究員(2003-2005)。日本手話学会・会長(2002-2008)。障害学会・理事(2003.4.1-、『障害学研究』編集委員会・委員長)、Sign Language Studies 編集委員。
■専門分野……開発経済学、障害と開発、手話(言語)学

角田太作 (つのだ たさく)

国立国語研究所・教授
文学士(東京大学)、M.A.(Monash University、オーストラリア)、Ph.D.(Monash University、オーストラリア)、Griffith University, Language Centre(オーストラリア)、名古屋大学文学部、筑波大学文芸言語学系、東京大学文学部・人文社会系研究科を経て、2009年10月より国立国語研究所言語対照研究系長、教授。
■専門分野……オーストラリア原住民語学、言語類型論、言語消滅危機と言語活性化

菊澤 律子 (きくさわ りつこ)

国立民族学博物館・准教授
東京大学大学院言語学専攻修士課程修了(文学修士、言語学)、ハワイ大学マノア校大学院言語学科博士課程修了(Ph.D., Linguistics)。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(1995-2005)を経て、2005年より現職。国際歴史言語学会長、国際オーストロネシア言語学会・運営委員。
■専門分野……言語学(記述言語学、歴史言語学、比較統語論、類型論)、オセアニアの先史研究

編集後記

人間文化研究機構が発足して7年、昨年からは二期目の中期目標・中期計画の期間に入った。機構の目的の一つには、構成する各機関間の連携を深め、新たな研究の可能性を開いていくことがあると私は理解している。機構の公開講演会・シンポジウムは、そうしたものの手がかりの一つになるう。

今回の講演・シンポジウムは、国立民族学博物館と国立国語研究所の共催、そして国文学研究資料館の協力もえて、機関の境を越えて行われた。テーマは「ことばの類型と多様性」であって、それ自体むしろ言語学という固有の学問領域に関わるものである。しかし、人間の文化とそれを研究する学問が無限に広がるように、言語の研究もさまざまな新しい知見や方法を拓いている。それを知るには絶好の機会であったというのが私の率直な感想である。

ところで、国立民族学博物館では2008年度より本館展示の新構築を行っており、昨年3月には音楽展示とともに、言語展示が新しくなって公開された。その基本的な考え方や新しい展示手法には、いくつかの点で今回のシンポジウムの内容と相通ずるものがある。展示も研究の成果を発信する重要な媒体であるからと思われる。いずれにせよ、内容については本号をじっくりと読んでいただければ幸いである。

今回の事業実施にあたっては、人間文化研究機構の本部や、国立国語研究所の方々のご尽力があり、また国立民族学博物館に関しては、管理部研究協力課の皆さんに大いに活躍していただいた。ここに改めて御礼を申し上げたい。

人間文化研究機構

第14回公開講演会・シンポジウム実行委員長

田村克己(国立民族学博物館・教授)

大学共同利用機関法人

人間文化 vol.13

特集

人間文化研究機構 第14回公開講演会・シンポジウム

ことばの類型と多様性

2011(平成23)年5月30日発行

編集・発行人 石上英一
発行 大学共同利用機関法人
人間文化研究機構
〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
神谷町セントラルプレイス 2階
TEL:03-6402-9200(代)
<http://www.nihu.jp/>

編集 山内編集事務所

デザイン 緒方裕子

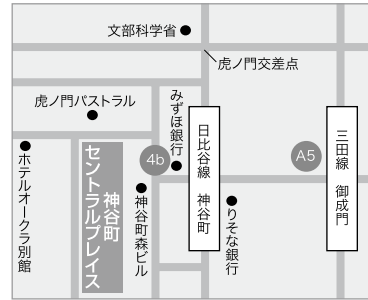
印刷 協和リソアート株式会社

今回の公開講演会・シンポジウムでは講演内容の手話通訳を行いました。
手話通訳者
(株)comm・プラス(中嶋直子/高橋智美/若林真実)



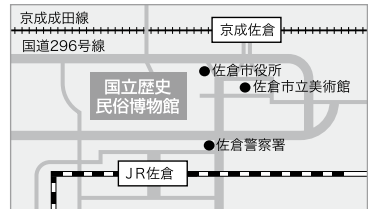
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13 神谷町セントラルブレイス2階
TEL:03-6402-9200(代表)
<http://www.nihu.jp/>
(最寄り駅)
地下鉄日比谷線神谷町駅(出口4b徒歩約2分)
地下鉄三田線御成門駅(出口A5徒歩約10分)



国立歴史民俗博物館

〒285-8502
千葉県佐倉市城内町117
TEL:043-486-0123(代表)
<http://www.rekihaku.ac.jp/>



国文学研究資料館

〒190-0014
東京都立川市緑町10-3
TEL:050-5533-2900(代表)
<http://www.nijl.ac.jp/>



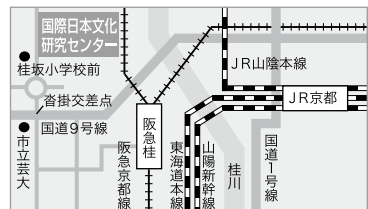
国立国語研究所

〒190-8561
東京都立川市緑町10-2
TEL:042-540-4300(代表)
<http://www.ninjal.ac.jp/>



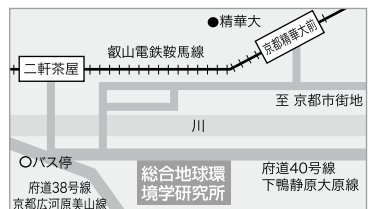
国際日本文化研究センター

〒610-1192
京都市西京区御陵大枝山町3-2
TEL:075-335-2222(代表)
<http://www.nichibun.ac.jp/>



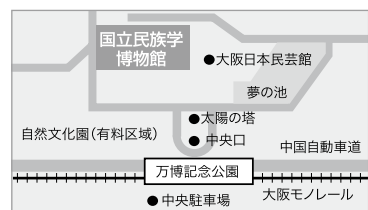
総合地球環境学研究所

〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457-4
TEL:075-707-2100(代表)
<http://www.chikyu.ac.jp/>



国立民族学博物館

〒565-8511
大阪府吹田市千里万博公園10-1(万博記念公園内)
TEL:06-6876-2151(代表)
<http://www.minpaku.ac.jp/>





大学共同利用機関法人
人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館 国文学研究資料館 国立国語研究所 国際日本文化研究センター 総合地球環境学研究所 国立民族学博物館